

仙台市文化財調査報告書第 368 集

# 沼向遺跡第36次調査

—宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書V—

2010年3月

仙台市教育委員会



## 序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り、誠に感謝申し上げます。

ここで報告しますのは、仙塩広域都市計画事業・仙台港背後地土地区画整理事業に伴う遺跡発掘調査のうち、沼向遺跡の第36次調査をまとめたもので、沼向遺跡としては4冊目の報告書となります。

この区画整理事業は、仙台港の増大する物流需要と船舶の大型化・コンテナ化等の輸送革新に対応するため、仙台港に隣接する北側から西側の背後地一帯を、宮城県はもとより、東北地方の国際貿易・交通拠点として、また仙台都市圏の物流拠点・工業生産拠点としての機能をもつべき地区として整備計画されました。現在、宮城県が施行主体で、県と仙台市が共同で整備に当たっております。

この区画整理地内の土地利用は、センター地区、流通業務地区、工業地区、住宅地区の4つに区分されており、ここで報告します沼向遺跡は工業地区に該当する、一番海辺に近い遺跡です。今回の第36次調査では、A区において古墳時代前期を主とした遺構・遺物が検出され、これまでの調査で知られていたように、居住域としての土地利用が確認されました。

先人の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大事な仕事であると思います。つきましては、今回の調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、学術研究のみならず学校教育や生涯教育などのあらゆる場面で活用され、皆様の文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に際しましてご指導、ご協力下さいました皆様に心より感謝申し上げます次第です。

平成22年3月

仙台市教育委員会  
教育長 荒井 崇

## 例 言

1. 本書は仙台港背後地土地整理区画整理事業に伴い実施された、沼向遺跡第36次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は仙台市教育委員会の委託を受け、大成エンジニアリング株式会社が行った。
3. 調査は仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 斎野裕彦・佐伯修一の監理のもとに、大成エンジニアリング株式会社 伊藤俊治・岩瀬雄史が行った。
4. 本書の執筆は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課斎野・佐伯の監修のもとに、大成エンジニアリング株式会社 岩瀬が担当し、伊藤が補佐した。
5. 調査及び報告書作成にあたり、下記のデジタル機器・ソフトウェアを使用した。

測量・遺構計測	遺構くん	(株式会社CUBIC)
遺構図・遺物実測図編集	Photoshop・Illustrator	(Adobe)
報告書編集作成	Word・Excel	(Microsoft)
	InDesign	(Adobe)
6. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、次の方々・機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(五十音順・敬称略)  
惟村忠志 田口雄一 仙台港背後地土地区画整理事務所
7. 磁器の鑑定は、第20図10を仙台市教育委員会 佐藤洋、他を大成エンジニアリング株式会社 原みちる・牧野麻子が行った。
8. 本書に係る遺物・写真・実測図版等の資料については、仙台市教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1996年度版)に準拠している。
2. 本書中の第1章第1～4図は、沼向遺跡第35次調査報告書の第1章第1～5図のデータを加工し使用している。
3. 図中の座標値は、沼向遺跡第1～35次調査に倣い日本測地系座標(平面直角座標系X)を使用した。
4. 本書で使用した方位は全て真北を基準としている。
5. 本書で使用した縮尺は下記の通りである。縮尺の詳細は各図のスケールを参照されたい。  
全体図 1/200 遺構 1/60 1/100 遺物 1/1 1/2 1/3
6. 基本層の表記は、沼向遺跡第1～35次調査に倣い浜堤列の基本層序はローマ数字を用いた。
7. 遺構名の略号は、SD：溝跡・溝状遺構、SK：土坑、SX：性格不明遺構、P：ピットを使用した。これら遺構のなかに埋まっている土を「埋土(まいど)」とした。
8. 遺構名は遺構ごとに付け、「遺構略号、調査回数、遺構番号」の順番に表記した。遺構番号は遺構の種類ごとに01番から付けた。例えば第36次調査1号溝は「SD3601」となる。
9. 遺構の主軸方向は、遺構の長軸の方位とした。
10. 遺物の登録・整理及び報告書の表示には、以下の略号を使用した。  
A：縄文土器 B：弥生土器 C：非ロクロ土器 D：ロクロ土器 E：須恵器  
G：土師質土器 I：陶器 J：磁器 K：石器・石製品

# 目 次

序 文	i
例 言	ii
凡 例	ii
目 次	iii
挿図目次	iv
表目次	iv
写真図版目次	iv
第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	2
第3節 遺跡の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	4
第4節 調査の方法と経過	6
1. 調査区と調査Gridの設定	6
2. 遺構の名称	6
3. 基本層序と検出遺構	6
4. 調査方法	6
5. 調査経過	6
第5節 整理作業の方法と経過	7
第2章 第36次調査A区	8
第1節 調査概要	8
1. A区概要	8
2. 基本層序	8
第2節 検出遺構と出土遺物	8
1. III層上面遺構	8
2. II層上面遺構	16
3. その他の出土遺物	24
第3章 第36次調査B区	26
第1節 調査概要	26
1. B区概要	26
2. 基本層序	26
第2節 検出遺構と出土遺物	27
1. III層上面遺構	27
2. II層上面遺構	29
第4章 まとめ	33
第1節 第36次調査A区	33
1. III層上面遺構について	33
2. II層上面遺構について	34
第2節 第36次調査B区	34
第3節 まとめ	34
引用・参考文献	35
写真図版	37
抄録	47

## 挿図目次

第1図	遺跡分布図	1
第2図	遺跡範囲と調査地点	2
第3図	仙台平野北部微地形分類図	3
第4図	周辺の遺跡地図	4
第5図	第36次調査A区東壁基本土層断面位置図・土層断面図	8
第6図	A区Ⅲ層上面遺構全体図	9
第7図	SX3604平面図・断面図	11
第8図	SX3607平面図・断面図	12
第9図	SX3604・3607出土遺物	12
第10図	SX3608平面図・断面図	12
第11図	SX3608出土遺物	13
第12図	SX3613平面図・断面図・遺物微細図	14
第13図	SX3613出土遺物	15
第14図	SX3614平面図・断面図	16
第15図	A区Ⅱ層上面遺構全体図	17
第16図	Ⅱ層上面SD溝跡平面図・断面図 (1)	19
第17図	Ⅱ層上面SD溝跡平面図・断面図 (2)	20
第18図	Ⅱ層上面SD溝跡出土遺物	21
第19図	SX3603出土遺物	21
第20図	その他の出土遺物	23
第21図	沼向遺跡第36次調査A区検出遺構新旧関係模式図	25
第22図	第36次調査B区西壁基本土層断面位置図・土層断面図	26
第23図	SX3617平面図・断面図	27
第24図	SX3618・3619平面図・断面図	27
第25図	B区Ⅲ層上面遺構全体図	28
第26図	SD3614平面図・断面図	29
第27図	SX2812平面図・断面図	29
第28図	SX3616平面図・断面図	29
第29図	B区Ⅱ層上面遺構全体図	30
第30図	沼向遺跡第36次調査B区検出遺構新旧関係模式図	31
第31図	古墳時代前期の遺物	33

## 表目次

第1表	遺跡地名表	5
第2表	沼向遺跡第36次調査出土遺物一覧表	31
第3表	第36次調査A区・B区D溝跡観察表	32
第4表	第36次調査A区・B区SK土坑跡観察表	32
第5表	第36次調査A区・B区SX性格不明遺構観察表	32
第6表	第36次調査A区・B区ピット観察表	32

## 写真図版目次

写真図版-1	(航空写真)	37
写真図版-2	(A区)	38
写真図版-3	(A区)	39
写真図版-4	(A区)	40
写真図版-5	(A区)	41
写真図版-6	(A区)	42
写真図版-7	(A区)	43
写真図版-8	(B区)	44
写真図版-9	(B区)	45
写真図版-10	(遺物)	46

# 第1章 調査概要

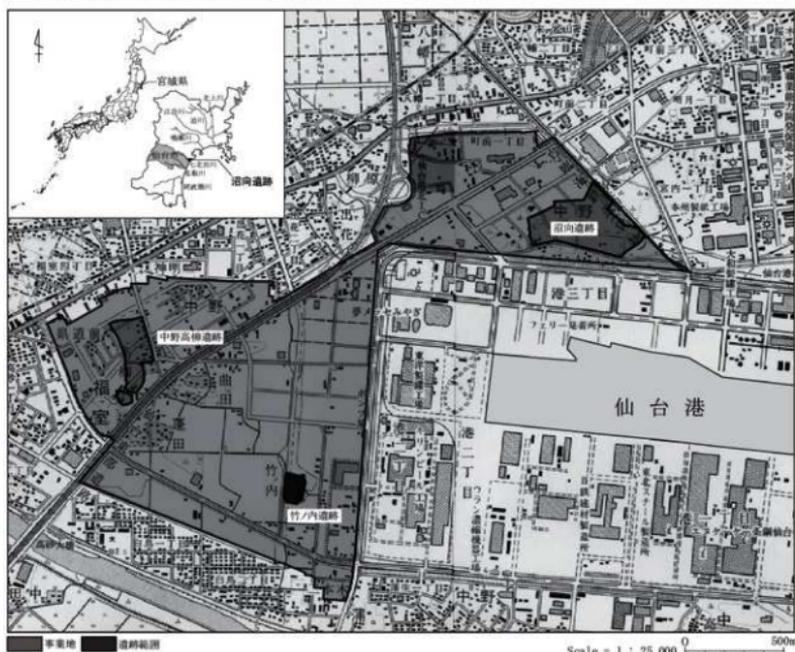
## 第1節 調査に至る経緯

平成2年11月16日に都市計画決定（平成3年7月23日事業計画決定）された事業区域には、現在、発掘調査対象遺跡として中野高柳遺跡、竹ノ内遺跡、沼向遺跡（遠藤館含む）がある。

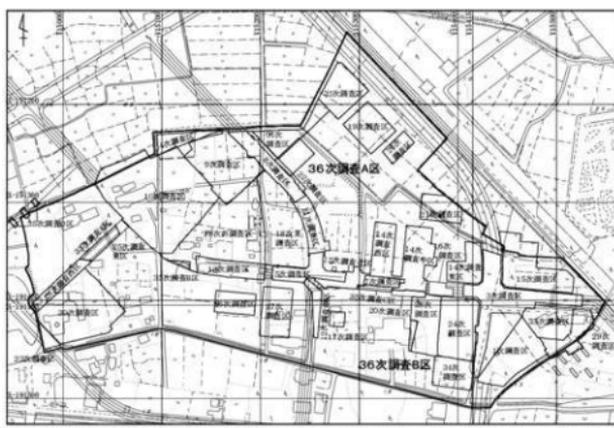
平成2年度から土地区画整理を担当する県土木側と文化財行政を担当する宮城県文化財保護課及び仙台市文化財課との間で、事業と遺跡の調査等について協議が重ねられた。協議の一環として、周知されていた高柳A遺跡、高柳B遺跡、竹ノ内遺跡、沼向遺跡、中野曲田板碑、耳取観音堂板碑などについて、平成2年度に宮城県文化財保護課、仙台市文化財課及び宮城県国際港都市整備課の3者で、改めて分布調査を行った。平成3年度から5年度にかけては、分布調査の結果を受けて、高柳A・B遺跡と竹ノ内遺跡の確認調査を宮城県文化財保護、沼向遺跡の確認調査を仙台市文化財課が実施した。

平成5年9月7日、確認調査の報告会を開催、遺跡範囲を確定し、本調査範囲を文化財側から説明した。このときに高柳A遺跡と高柳B遺跡を中野高柳遺跡に一本化し、その範囲も他の遺跡同様、若干変更している。

それを受けて平成6年度から本調査を開始した。その後、平成6年度の沼向遺跡の調査において、その北側の水田（後背湿地）を試掘調査し、水田跡の広がりを確認したので、遺跡の範囲を北側に拡大している。遺跡範囲は東西約600m、南北約350mの約11.7haである。平成20年度までに35次にわ



第1図 遺跡分布図



第2図 遺跡範囲と調査地点

たる調査が行われ、古墳時代前期、後期、奈良～平安時代初頭、近世を中心とした遺構・遺物が検出されている。今回、調査の対象となったのは、第2図に示した通りである。なお、第1～3次調査報告書、第35次調査報告書（仙台市教育委員会 2000、2009 以下「既刊報告書」と略す）はすでに刊行されており、この報告書と同時に、2010年3月に第4～34次調査報告書（仙台市教育委員会 2010 以下「第4～34次報告書」と略す）が刊行される。

## 第2節 調査要項

遺跡名称	沼向遺跡（宮城県地名表記載番号 01151 仙台市文化財登録番号 C-177）
所在地	宮城県仙台市宮城野区中野字沼向 91-13、117
調査主体	仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）
調査監督者	調査係主査 斎野裕彦・調査係文化財教諭 佐伯修一
調査担当	大成エンジニアリング株式会社 主任調査員 伊藤俊治・調査員 岩瀬雄史・計測員 狩野稔・計測補助員 橘川政志
調査面積	902㎡（A区：761㎡ B区：141㎡）
調査期間	平成21年9月1日～11月6日 （A区9月1日～10月30日 B区9月18日～11月6日）
検出遺構	総計 66基 A区 計 54基 II層上面遺構 溝 11条 土坑 7基 ビット 15基 性格不明遺構 7基 III層上面遺構 溝 2条 ビット 3基 性格不明遺構 9基 B区 計 12基 II層上面遺構 溝 1条 ビット 3基 性格不明遺構 2基 III層上面遺構 ビット 3基 性格不明遺構 3基
出土遺物	総数 788点（弥生土器・土師器・須恵器・石器・石製品・陶磁器など、平箱 2箱分）

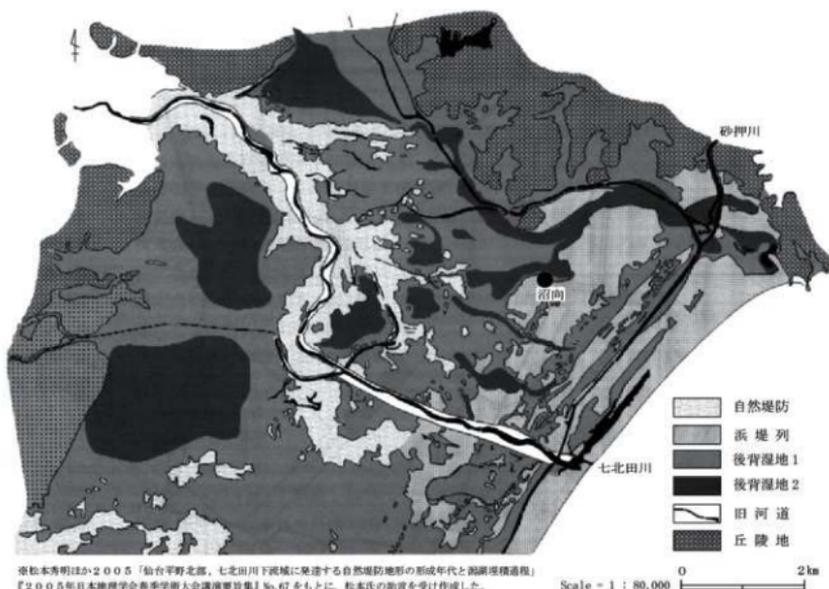
### 第3節 遺跡の位置と環境

#### 1. 地理的環境

仙台市は宮城県の中央やや南に位置し、西は奥羽山脈があり山形県に接し、東は太平洋に面している。市域は東西に長く、山地から海までであることから東と西では地理的環境が大きく異なる。地理的に西から山地・丘陵地・低地に大別される。低地はさらに活断層である長町一利府線を境に、西側は台地、東側は仙台平野と呼ばれる沖積平野に分かれる。

仙台平野は北から七北田川、名取川、阿武隈川の3つの河川が流れ、扇状地や自然堤防を形成し、海岸線に沿って3列の浜堤が形成されている。最も内陸にある第Ⅰ浜堤列は現在の海岸線から約5km内陸に位置し、中央の第Ⅱ浜堤列は約2km内陸に位置し、そして現在の海岸線に沿って第Ⅲ浜堤列が形成されている。沼向遺跡は仙台平野北部の七北田川下流域にある第Ⅰ浜堤列と、その北側にある後背湿地にかけて立地している(第3図)。

七北田川は幹線流路長45kmで、泉ヶ岳周辺に端を発し、仙台市内を蛇行しながら仙台湾に注いでいる。七北田川下流域は細い海進で侵入した内湾が浜堤に封鎖され、かつては潟湖や湿地帯が広がっていた。現在、七北田川河口は蒲生にあり、寛文年間に流路の変更が行われるまでは、浜浜に河口があった。そのため七北田川の北方に位置する本遺跡は、かつては七北田川の南方に位置していた。潟湖や湿地帯は江戸初期に灌漑が進み、現在の穀倉地帯となった。



※松本秀明ほか2005「仙台平野北部、七北田川下流域に発達する自然堤防地形の形成年代と潟湖環境推定」『2005年日本地理学会春季学術大会講演要旨集』No.67をもとに、松本氏の助言を受け作成した。

第3図 仙台平野北部微地形分類図

## 2. 歴史的環境

### (1) 縄文時代

七北田川流域では縄文時代の遺跡は金堀貝塚、五万崎遺跡など少ないが、七ヶ浜半島では、大木囲貝塚や室浜貝塚など貝塚を主として数多く分布している。これらの遺跡では晩期中葉から製塩土器が出土しており、晩期には製塩が行われていた。

### (2) 弥生時代

弥生時代中期中葉にかけて土器製塩が行われている。七北田川流域では市川橋遺跡で中期中葉の包含層が検出されている。七ヶ浜半島では東宮貝塚、榊形囲貝塚などが分布するが、弥生時代中期後葉以降は遺跡数が減少する。

### (3) 古墳時代

古墳時代になると、拠点的な集落の形成が広く見られる。七北田川流域では山王遺跡や鴻ノ巣遺跡などで自然堤防を居住域として利用し、後背湿地などの湿地帯に水田を作り生産域として利用していた。沼向遺跡では前期の方形周溝墓や古墳が築かれるが、名取川流域以南のように遠見塚古墳や雷神山古墳といった前方後円墳は見られない。

### (4) 古代

8世紀の初め頃には、沼向遺跡の北方の丘陵に多賀城と多賀城廃寺が築かれる。その南方には市川橋遺跡の調査によって多賀城南門から延びる南北大路と、それに交差する東西大路を基軸とした方格地割が行われていることが明らかにされている。延暦23年(802年)に胆沢城へ鎮守府は移されるが、その後も多賀城は律令体制下の東北経営の中心地としての役割を果たした。

### (5) 中世

中世になると七北田川流域にも荘園が築かれ、沼向遺跡周辺には八幡荘があった。七北田川の自然堤防上には新田遺跡、山王遺跡、中野高柳遺跡などがあり、武士階級の屋敷と考えられる遺構が検出され



第4図 周辺の遺跡地図

第1表 遺跡地名表

No.	遺跡名	種別	立地	時代	No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	日向遺跡	古墳・墓塚・水田跡	浜野・茂野埋地	縄文・弥生・古墳・奈良・	83	楯本遺坑穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳後
2	中野高森跡	古墳・屋敷・水田跡	自然発跡	弥生・古墳	84	八代石原遺坑穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	縄文・古墳
3	竹ノ内遺跡	板碑	高森	平安・中世・近世	85	楯本遺跡	古墳・野跡	丘陵斜面	古墳後
4	真草園寺板碑	板碑	自然発跡	中世	86	柳原貝塚	貝塚・野跡	丘陵斜面	縄文・弥生・古代
5	西宮遺跡	散布地	自然発跡	奈良・平安	87	山ノ原	河川	野原埋地	近世
6	牛小倉遺跡	散布地	自然発跡	奈良・平安	88	柳原横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳後
7	和田織田跡	屋敷	浜野	近世	89	砂山横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
8	田母神丸板碑	屋敷	自然発跡	近世	90	藤崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳後
9	山ノ原	河川	浜野	近世	91	野天宮遺跡	散布地	丘陵斜面	古代
10	岡田神社板碑群	板碑	自然発跡	中世	92	野天宮遺跡	散布地	丘陵斜面	古代
11	藤原宮ノ神社板碑群	板碑	自然発跡	中世	93	野天宮遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文・弥生
12	藤原遺跡	散布地	自然発跡	中世	94	諏訪神社遺跡	散布地・野跡	丘陵斜面	縄文・古代
13	六丁の目 北野板碑	板碑	自然発跡	中世	95	鬼の神山横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
14	小原遺跡	散布地	自然発跡	平安	97	河川貝塚	貝塚	丘陵斜面	縄文・弥生
15	鶴巻貝遺跡	散布地	自然発跡	平安	98	林崎貝塚	貝塚	丘陵斜面・海岸	縄文・弥生
16	田子遺跡	散布地	自然発跡	平安	99	野山遺跡	野跡	丘陵斜面	縄文・弥生
17	鶴巻寺遺跡	散布地	自然発跡	平安	100	鬼ノ神山(野山貝塚)	貝塚・野跡	丘陵斜面	縄文・弥生・奈良
18	鶴巻野神社板碑	板碑	自然発跡	中世	101	長原貝塚	貝塚・野跡	丘陵斜面	縄文・平安
19	藤原田遺跡	散布地	自然発跡	平安	102	東原遺跡	散布地	丘陵斜面	古墳
20	八幡ノ神社板碑	板碑	自然発跡	中世	103	三田遺跡	野跡	丘陵斜面	不明
21	中野高森板碑	板碑	自然発跡	中世	104	谷口遺跡	野跡	丘陵斜面	不明
22	出花遺跡	散布地	自然発跡	奈良・平安	105	八木遺跡	野跡	丘陵斜面	中世
23	出花一丁目板碑群	板碑群	自然発跡	中世	106	八木田遺跡	貝塚	丘陵	縄文前～後
24	出花一丁目板碑群	板碑	自然発跡	中世	107	左邊遺跡	散布地	丘陵	古代
25	出花栄堂神社板碑群	板碑群	自然発跡	中世	108	小畑貝塚	貝塚	丘陵	縄文・弥生・古代
26	賀茂寺板碑	板碑	自然発跡	中世	109	左邊貝塚	貝塚	丘陵	縄文前・古代
27	西光寺板碑群	板碑	自然発跡	鎌倉	110	山田遺跡	散布地・野跡	丘陵斜面	弥生・平安
28	福宮板碑群	板碑	自然発跡	中世	111	小丸遺跡	散布地・野跡	丘陵斜面	弥生・古代
29	雲洞板碑群	板碑	自然発跡	中世	112	水原貝塚	貝塚	丘陵斜面	弥生・古代
30	野野原寺板碑群	板碑	自然発跡	中世	113	水原遺跡	散布地・野跡	丘陵斜面	平安
31	葉下遺跡	散布地	自然発跡	平安	114	水原横穴墓	横穴墓	南斜面	古墳
32	葉下板碑群	板碑	自然発跡	中世	115	土浜ノ貝塚	貝塚	丘陵斜面	弥生・古代
33	土浜遺跡群	板碑群	自然発跡	中世	116	土浜貝塚	貝塚・野跡	丘陵斜面	平安
34	洲ノ内遺跡	古墳・墓塚	自然発跡	弥生～中世	117	清水河原貝塚	墓塚	丘陵斜面	弥生・平安
35	洲ノ内遺跡	古墳・墓塚・水田跡	自然発跡	奈良・平安・中世・近世	118	清水貝塚	貝塚・野跡	丘陵斜面	古代
36	洲ノ内板碑	板碑	自然発跡	中世	119	藤原墓	貝塚・野跡	丘陵斜面	縄文・古代
37	洲ノ内板碑群	板碑	自然発跡	鎌倉	120	上貝塚	貝塚	丘陵斜面	縄文・古代
38	赤野原寺板碑群	板碑	自然発跡	中世	121	野田貝塚	貝塚	丘陵斜面	平安
39	中野曲ノ内遺跡	城跡	丘陵	中世	122	野田遺跡	散布地	丘陵斜面	古代
40	仁敷加尾跡	城跡	丘陵	中世	123	武原貝塚	貝塚	海岸	縄文・弥生・平安
41	沼原前板碑群	板碑群	丘陵斜面	古墳後	124	一月田貝塚(野原貝塚)	貝塚	丘陵斜面	縄文後・弥生
42	沼原前遺跡	宗遺跡・城跡	丘陵	中世・近世	125	沼原神社遺跡	散布地	丘陵斜面	古代
43	宮宮遺跡	城跡・宗遺跡	丘陵斜面	縄文・古墳～近世	126	沼田貝塚	貝塚	丘陵斜面	縄文前
44	大目南遺跡	古墳・屋敷	自然発跡	平安・中世	127	沼田遺跡	城跡	丘陵	中世?
45	大目北遺跡	古墳・屋敷	自然発跡	古代・近世	128	榎ノ内遺跡	貝塚	丘陵斜面	縄文前・中
46	新田遺跡	古墳・屋敷	自然発跡	縄文・古墳～中世	129	沼ノ内貝塚	貝塚	丘陵斜面	縄文前・中
47	安楽寺遺跡	寺院	自然発跡	古代末～中世	130	花野田跡	城跡	散布地	平安・中世
48	西庭跡	城跡	自然発跡	中世	131	藤原神社遺跡	散布地	丘陵斜面	古代
49	山ノ原遺跡(河川埋地)	遺跡・都市・野跡・貝塚	自然発跡	弥生～近世	132	表赤貝塚	貝塚	野原	平安
50	山ノ原遺跡	遺跡・都市・野跡・貝塚	自然発跡	弥生～近世	133	高山横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳後
51	六貫田遺跡	散布地	自然発跡	古代	134	新田前貝塚	貝塚・野跡	丘陵	古代
52	赤川遺跡	遺跡・都市	丘陵・自然発跡	縄文～平安	135	一本松貝塚	貝塚・野跡	海岸	縄文・平安
53	特別区 多賀城跡	国府	丘陵・神鏡平野	奈良・平安	136	一本松横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	中世
54	金飯貝塚	貝塚	丘陵斜面	縄文前～後	137	嵐家古跡群	城跡	丘陵	中世
55	玉乃崎遺跡	島	縄文前・中・弥生・古墳後	138	嵐家神社遺坑穴墓群	散布地・野跡	丘陵斜面	縄文前	
56	田原横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳後	139	柳野田遺跡	散布地	丘陵斜面	奈良・平安
57	田原三遺跡	古墳・寺院	丘陵斜面	古代	140	野天宮遺跡	散布地	丘陵斜面	平安
58	西久遺跡	古墳	丘陵	古代・中世	141	野野原遺跡	横穴墓	丘陵斜面	奈良?
59	西宮遺跡	散布地	丘陵	古代・中世	142	一本原遺跡	塚	丘陵	平安
60	水原遺跡	散布地	丘陵	古代・中世	143	十三塚遺跡	散布地	丘陵斜面	古代
61	野田遺跡	散布地・城跡	丘陵斜面	古代・中世	144	野野原遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文・後
62	矢作ノ尾跡	散布地・城跡	丘陵	古代・中世	145	左邊跡	散布地	丘陵斜面	古代
63	藤原遺跡	宮内・城跡	丘陵	古代・中世	146	天形遺跡	散布地	丘陵	古代
64	牛野家住宅	祠堂	近世	近世	147	北邊遺跡	散布地	丘陵	古代
65	志高ノ古墳群	円墳	丘陵	古墳中～後	148	藤原遺跡群	散布地	丘陵・自然発跡	縄文・古代
66	赤野原寺跡	寺院	丘陵	奈良・平安	149	野天宮神社	神社	丘陵	平安
67	藤原遺跡	遺跡・都市・城跡	丘陵	奈良・平安・中世	150	野野原遺跡	散布地	丘陵斜面	古墳・平安
68	榎ノ内遺跡	城跡	丘陵	古代・中世	151	野天宮遺跡	散布地	丘陵斜面	古墳
69	新川野田跡	城跡	丘陵	中世	152	泉ノ古墳	円墳	丘陵	古代
70	藤原丸古墳	円墳	丘陵	古墳後	153	榎ノ内遺跡	城跡	丘陵	中世
71	桜井跡	城跡	丘陵	中世	154	沼原遺跡	宗遺跡	丘陵	中世
72	東田中庄南遺跡	散布地・城跡	丘陵	古代・中世	155	宮切城跡	城跡	丘陵	中世
73	志引遺跡	散布地・城跡	丘陵	古代・中世	156	北沢横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳
74	八幡板碑	散布地・城跡	丘陵	古代・中世	157	菅谷跡	城跡	丘陵	平安・中世
75	八幡ノ内遺跡	散布地	丘陵	古代・近世	158	菅谷遺跡	散布地	丘陵	古代
76	藤原遺跡	散布地	丘陵	古代	159	菅野遺跡	散布地	丘陵	古代
77	榎ノ内遺跡	城跡?	神鏡平野	不明	160	二葉原野原丘	野原丘	丘陵	古墳
78	西久遺跡	散布地	自然発跡	古代	161	藤原横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳
79	水原遺跡	散布地	自然発跡	古代	162	藤原崎内遺跡	散布地	丘陵斜面	古代
80	大穴遺跡	散布地	丘陵	縄文後・古代	163	菅谷寺跡	横穴墓	丘陵	古墳後
81	大穴河原	河川遺跡・貝塚・野跡	海岸	弥生・中世	164	菅谷横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳後
82	大穴横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳後	165	加藤遺跡	貝塚	丘陵斜面	縄文前・古代

ている。

#### (6) 近世

伊達氏が仙台の地に移ると、七北田川下流域では大代運河、舟入掘、船引掘の開削、七北田川流路の付け替えなど大規模な土木工事が行われた。これによって水運が整備され、新田開発が行われるようになり、沼向遺跡にも集落が形成される。

## 第4節 調査の方法と経過

今回の発掘調査では、沼向遺跡第1～35次調査で用いられた調査の方法を踏襲している。詳しくは既刊報告書、及び第4～34次調査報告書を参照されたい。

### 1. 調査区と調査Gridの設定

本調査は、遺跡範囲の北部(A区)と南部(B区)の2ヶ所で行った(第3図)。調査区は教育委員会の立会いのもとに設定した。A区は22次調査区(平成14年度実施)の東側、31次調査区(平成16年度実施)の南側に位置する。B区は28次調査区(平成15年度実施)の西側に位置する。

Gridは日本測地系(平面直角座標系X)を用いて、国家座標 $X = -191405$ 、 $Y = 15415$ を基軸とし、大Gridは $10 \times 10$  m、小Gridは $5 \times 5$  mで設定した。大Grid名は、Y軸では基点から北へ0A・0B・0C…、南へA・B・C…、X軸では東へ1・2・3…、西へ01・02・03…とする。小Grid名は、北西から時計回りにa・b・c・dとした。遺構の位置はGridで示し、遺構に伴わない遺物はGridごとに取り上げた。

### 2. 遺構の名称

遺構名の略号は、SD:溝跡・溝状遺構、SK:土坑、SX:性格不明遺構、P:ピットを使用した。遺構番号は遺構の種類別に、1番から通し番号にしている。例えば第36次調査1号溝は「SD3601」のように、調査次数を付け表記している。また隣接する調査区から続く遺構については、先行する調査区の遺構名称を優先した。整理段階で遺構の再精査を行い、一部遺構名の振り直しを行った。

### 3. 基本層序と検出遺構

基本層序は既刊報告書に準じて分層した。本調査で確認できたのは浜提列のみで、後背湿地は確認できなかった。A区ではI a層・III e層、B区ではI a層・III a層・III b層・III c層・III d層・III e層・III f層・III g層を確認した。

沼向遺跡の遺構は、これまでの調査成果から、基本層II層上面で検出される遺構:II層上面遺構と、基本層III層上面で検出される遺構:III層上面遺構に分けられている。

本調査区ではII層がほとんど分布していないが、既刊報告書と第4～34次報告書をもとに、A区・B区ともにIII e層上面でII層上面遺構とIII層上面遺構の検出を行い、埋土の特徴で時期を分けた。B区の北側ではIII e層の堆積が薄く不明瞭なため、III f～III g層まで掘り下げて遺構の検出を行っている。

これらの遺構は、III層上面遺構の時期は縄文時代後期中葉から平安時代初頭、II層上面遺構の時期は近世(17世紀中葉～19世紀後半)であることが明らかになっている(既刊報告書、第4～34次報告書)。

### 4. 調査方法

表土はA区・B区ともにIII層上面まで重機で掘削した。遺構は鍬塵・移植ゴテ・スコップなどを使い、人力で検出し掘削した。また遺構は半截するか、適宜セクションを設定してベルトを残して掘削し、断面観察を行い、堆積状況を記録した。断面図は手作業によって1/20で図化した。平面図はトータルステーションで測量し、測量ソフト「遺構くん」で編集した。遺構や出土遺物の写真撮影は35mmのモノクロフィルムとリバーサルフィルム、デジタルカメラを使用した。調査区全景の写真撮影は、スカイマスター及びローリングタワーで行った。

### 5. 調査経過

9月1日(火)現場事務所を設置し、安全対策として道路側は単管バリケード、それ以外はカラーコー

- ン等による周囲の環境整備を行い、発掘調査への準備を整えた。発掘調査はA区から行い、B区はA区の進捗状況を見ながら適宜並行して調査を行うことにした。
- 9月2日(水)重機(バックホー)を使用してA区の北西から、隣接する22次調査と31次調査の遺構確認面の標高を参考に表土掘削を開始した。表土掘削後、人力で遺構検出を行ったが、遺構は確認できなかった。
- 9月8日(火)壁際にサブトレンチを設定して基本層序を確認するとともに、人力でさらに10～20cmほど掘り下げながら検出作業を行った。その結果、隣接する調査区の遺構確認面の標高より20～40cmほどの深さまで、本調査区の全体に亘って攪乱されていることがわかった。これを踏まえて教育委員会と協議し、重機で攪乱を掘削することにした。
- 9月16日(水)再度重機を入れてA区の攪乱を掘削すると、溝などの遺構プランが確認できた。
- 9月18日(金)B区の調査を開始し表土掘削を行った。B区もA区と同様に隣接する28次調査の遺構確認面の標高を参考に表土掘削を行った。A区の調査を優先するため、B区は表土掘削後にブルーシートで養生し、調査を一時中断した。
- 10月8日(木)台風18号が上陸した影響でA区、B区ともに水没し、特にB区は遺構確認面よりも高い位置まで地下水位が上昇し、以後調査終了まで下がることはなかった。そのためA区は24時間の排水体制を整え、B区も毎日早朝から小型ポンプを稼働させ、排水をしながらの調査となった。
- 10月16日(金)A区のⅡ層上面遺構の全景と、Ⅲ層上面遺構のプラン全景を高所作業車にて撮影した。
- 10月19日(月)A区のⅢ層上面遺構の掘削を開始し、それと並行してB区の調査を再開した。
- 10月30日(金)A区のⅢ層上面遺構の全景を高所作業車にて撮影し、調査を終了した。
- 11月4日(水)B区のⅡ層上面遺構の全景と、Ⅲ層上面遺構のプラン全景をローリングタワーで撮影した。
- 11月6日(金)B区のⅢ層上面遺構の全景をローリングタワーで撮影し、全ての作業を終了した。調査終了後は仕様に基づき各調査区ともに埋め戻しは行わなかった。A区の排土山は砂塵の飛散防止のため、全体をブルーシートで覆い養生した。

## 第5節 整理事業の方法と経過

整理事業は発掘作業終了後に、仙台市教育委員会と大成エンジニアリング株式会社で協議を行い、11月9日(月)より大成エンジニアリング株式会社府中事務所にて行った。

遺構の平面図と断面図の整合作業は、平面図を打ち出して断面図の複写とあわせて修正を行った。平面図は測量ソフト「遺構くん」で修正を行い、「イラストレーター」で作成した。断面図は修正した複写をスキャニングし、「イラストレーター」でトレースした。

遺物は洗浄後に注記し、大別後に遺構ごとに接合作業を行った。遺物の実測は手作業で行い、「イラストレーター」でトレースした。

### 発掘調査参加者

柏倉幸三 木村 博 齊藤勝彦 佐々春子 佐藤澄保 佐藤宗幸 庄司嘉光 進藤忠雄 高田哲夫 森谷悦子  
三浦陽子 目黒道夫 山内 広 吉田 勲 我妻興治

### 整理事業参加者

東 早花 上條房喜 栗山結花 小室峯子 白井順子 末松 宏 富田静香 中村君江 柳田美須穂 山崎裕子

## 第2章 第36次調査A区

### 第1節 調査概要

#### 1. A区概要

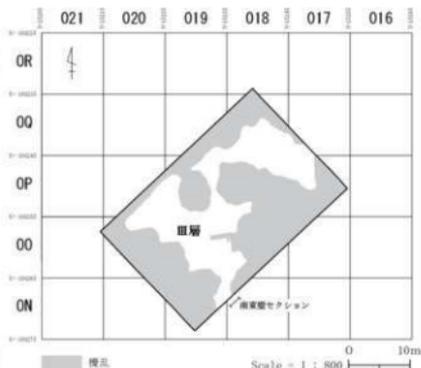
A区の調査期間は9月1日～10月30日で、調査面積は761㎡である。調査区の全体を覆うように攪乱があり、現地表面から浅いところで0.80m、深いところでは1.30m以上に及んでいる。そのため掘り込みの浅い遺構は失われている。第5図にその範囲を示した。検出した遺構は計54基で、その内訳はⅡ層上面遺構が溝11条、土坑7基、ピット15基、性格不明遺構7基、Ⅲ層上面遺構が溝2条、ピット3基、性格不明遺構9基である。A区ではⅡ層がないため、Ⅲ層上面でⅡ層上面遺構を検出した。またⅡ層上面遺構からは遺構に伴う遺物がほとんど出土せず、時期判断は埋土の特徴から行った。遺構確認面の標高は約0.80～1.10mである。

#### 2. 基本層序

A区では東壁と南壁で基本層序の観察を行い、Ⅲe層を確認した(第5図)。しかし調査区壁で自然堆積層を確認できた範囲は極僅かである。自然堆積層が残存している部分では、全体的にⅢe層が厚く安定して堆積している。

Ⅲ層 Ⅲe層を確認した。

Ⅲe層 にぶい黄色・黄褐色・にぶい黄褐色シルト質砂からなる。



第5図 第36次調査A区東壁基本土層断面位置図・土層断面図

### 第2節 検出遺構と出土遺物

#### 1. Ⅲ層上面遺構

##### (1) SD溝跡

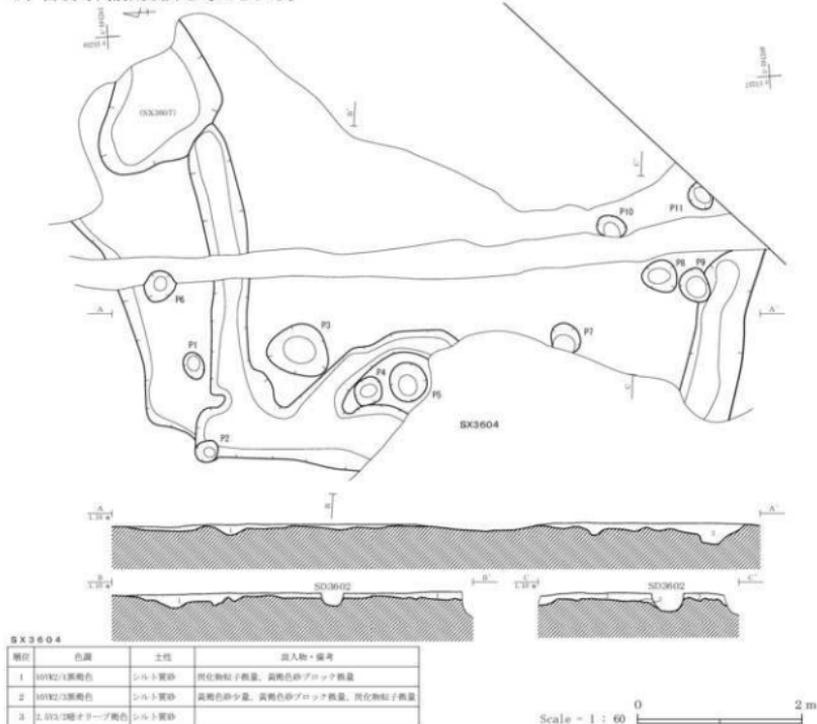
SD3611 (第3表) OP-018b-OQ-018cGridに位置する。南北方向の溝で主軸方位はN-24°-Eである。検出長3.31m、上端幅は0.45～0.62m、深さ0.15～0.18mである。断面形は皿状である。遺物が出土していないため、詳しい時期は不明である。

SD3613 (第3表) OO-019aGridに位置する。南北方向の溝で主軸方位はN-1°-Eである。検出長2.02m、上端幅0.75～0.80m、深さ0.10mである。断面形はU字状である。Ⅲ層上面遺構のSX3613と新旧関係があり、SX3613より古い。Ⅱ層上面遺構のSD3606と重複関係がある。遺物が出土していないため、詳しい時期は不明であるが、後述するSX3613の時期が、古墳時代前期であるため、それより古いことが考えられる。

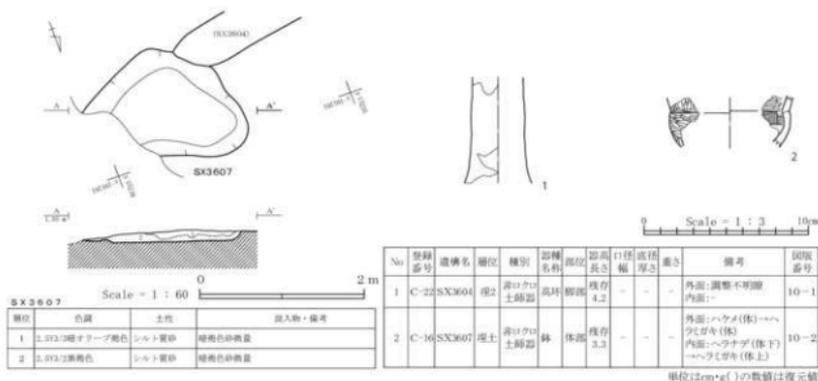
## (2) SX性格不明遺構

**SX3604** (第7・9図、第5表、写真図版4) ON-018a・019b・00-018d・019cGridに位置する。平面形は不整長方形である。Ⅲ層上面遺構のSX3607と新旧関係があり、SX3607より新しい。Ⅱ層上面遺構のSD3602と重複関係がある。東西は攪乱に切られる。大きさは、8.41m以上×4.36m以上で、深さは0.26mである。底面は起伏が多く、遺構壁際に溝状の落ち込みとピットが11基ある。溝状の落ち込みやピットの埋土は、SX3604の埋土とほぼ同一である。遺物は弥生土器と非ロクロ土器が埋土から出土している。第9図1は高坏の中実棒状の脚部で、表面が剥落していて調整は不明である。第9図1はその特徴から、古墳時代前期の塩釜式土器と考えられる。底面出土遺物がないため、SX3604の詳しい時期は不明であるが、埋土から古墳時代前期の塩釜式土器が出土しているので、古墳時代前期以降と考えられる。

**SX3607** (第8・9図、第5表、写真図版2) OO-018dGridに位置する。平面形は不整楕円形である。Ⅲ層上面遺構のSX3604と新旧関係があり、SX3604より古い。東側は攪乱に切られる。大きさは、1.66m×1.23m以上で、深さは0.18mである。遺物は非ロクロ土器が埋土から出土している。第9図2は丸底の鉢で、体部は内湾し口縁部は外反する。調整は外面ではハケメの後にヘラミガキ、内面はヘラナデが施される。第9図2はその特徴から、古墳時代前期の塩釜式土器と考えられる。底面出土遺物がないため、SX3607の詳しい時期は不明であるが、埋土から古墳時代前期の塩釜式土器が出土しているので、古墳時代前期以降と考えられる。

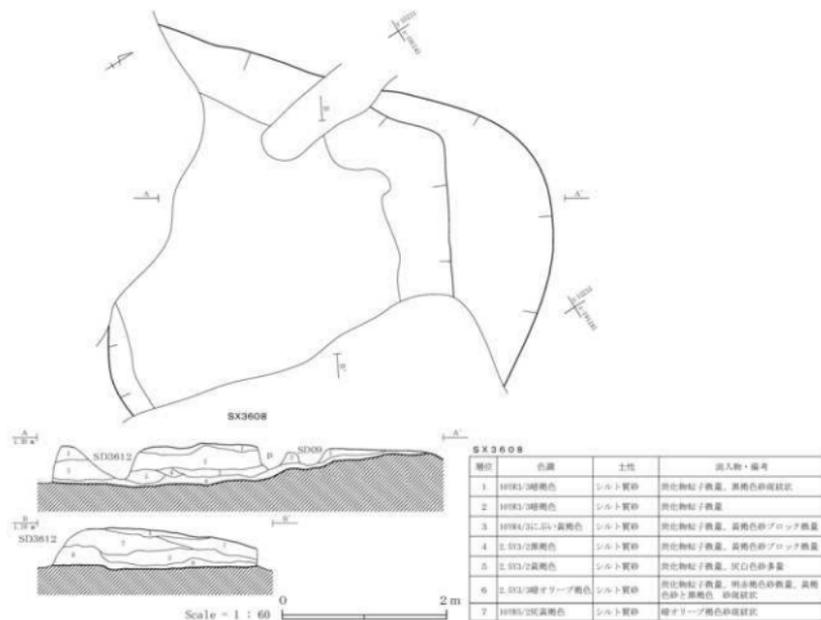


第7図 SX3604平面図・断面図



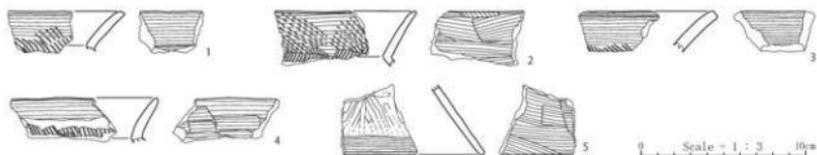
第8図 SX3607平面図・断面図

第9図 SX3604・3607出土遺物



第10図 SX3608平面図・断面図

SX3608 (第10・11図、第5表、写真図版2・3) OP-019abc・OQ-019cGridに位置する。平面形は不整楕円形である。Ⅱ層上面遺構のSD3609・12、P3618と重複関係がある。東西は攪乱に切られる。重複関係と攪乱により埋土の大部分が失われている。大きさは、4.68m以上×4.28m以上で、深さは0.54mである。遺物は弥生土器と、非ロクロ土師器が埋土から出土している。第11図1～4は甕で、口縁部は外傾する。調整は外面では口縁部にハケメの後にヨコナデ、体部にハケメ、内面ではヨコナデが施される。第11図5は高坏か器台の脚部で、脚部は直線的に開く。調整は外面ではヘラミガ



No.	登録番号	遺構名	層位	種別	器種・名物	部位	器高 長さ	口縁 幅	底径 長さ	重さ	備考	図版番号
1	C-32	SX3608	埋土	非ロクロ土師器	甕	口縁部	残存 2.6	-	-	-	外面:ハケメ(口)→ヨコナデ(口) 内面:ヨコナデ(口)	10-3
2	C-33	SX3608	埋土	非ロクロ土師器	甕	口縁部	残存 3.4	-	-	-	外面:ハケメ(口)→ヨコナデ(口) 内面:ヨコナデ(口)	10-4
3	C-34	SX3608	埋土	非ロクロ土師器	甕	口縁部	残存 2.5	-	-	-	外面:ハケメ(口)→ヨコナデ(口) 内面:ヨコナデ(口)	10-5
4	C-35	SX3608	埋土	非ロクロ土師器	甕	口縁部	残存 2.8	-	-	-	外面:ハケメ(口)→ヨコナデ(口) 内面:ヘラナデ(口)	10-6
5	C-36	SX3608	埋土	非ロクロ土師器	高環の器台	脚部	残存 4.3	-	-	-	外面:ヘラミガキ(脚)→ヨコナデ(脚) 内面:ヘラナデ(脚) 外面赤彩	10-7

第11図 SX3608出土遺物

単位はcm(g)の数値は復元値

キの後、端部にヨコナデ、内面ではヘラナデが施される。また外面のみ赤彩が施される。第11図1～5はその特徴から、古墳時代前期の塩釜式土器と考えられる。底面出土遺物がないため、SX3608の時期は不明であるが、埋土から古墳時代前期の塩釜式土器が出土しているため、古墳時代前期以降と考えられる。

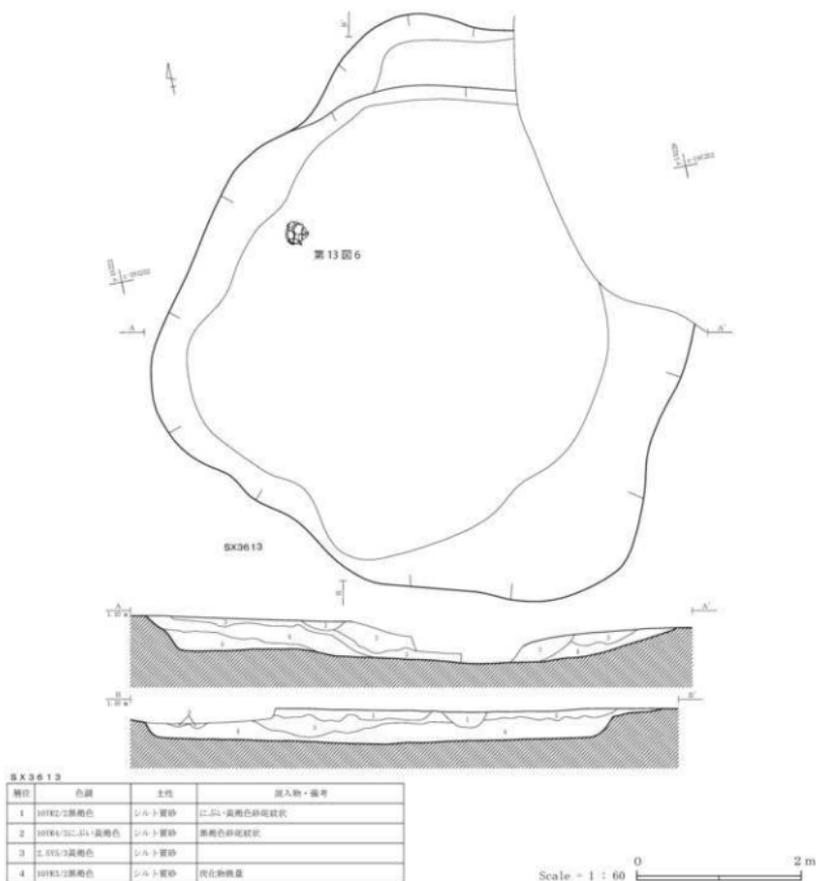
**SX3609** (第5表) OP-018dGridに位置する。平面形は楕円形である。南側は攪乱に切られる。大きさは、1.84m以上×0.62m以上で、深さは0.27mである。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SX3609の詳しい時期は不明である。

**SX3610** (第5表) OP-018b・OQ-018cGridに位置する。平面形は不明である。Ⅱ層上面遺構のSX3603と重複関係がある。南北を攪乱に切られる。大きさは、6.65m以上×4.69m以上で、深さは0.20mである。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SX3610の詳しい時期は不明である。

**SX3611** (第5表) OO-018a・OO-019bGridに位置する。平面形は不整形である。Ⅱ層上面遺構のSD3601・02・06と重複関係がある。大きさは、3.72m×2.45mで、深さは0.24mである。遺物が出土していないため、SX3611の詳しい時期は不明である。

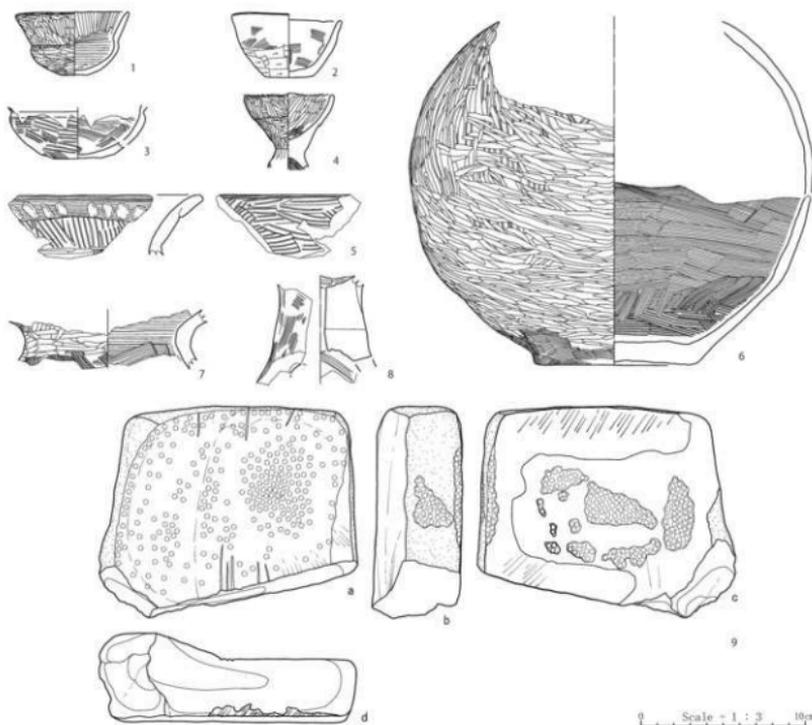
**SX3612** (第5表) OQ-018cdGridに位置する。平面形は不整形である。北側は攪乱に切られる。大きさは、4.69m×2.13mで、深さは0.14mである。遺物は弥生土器と非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SX3612の詳しい時期は不明である。

**SX3613** (第12・13図、第5表、写真図版3) OO-19b・020a・OP-019ad・020cGridに位置する。平面形は不整形丸方形である。Ⅱ層上面遺構のSD3604と重複関係がある。中央部と東側を攪乱に切られる。大きさは、6.94m以上×6.00mで、深さは0.59mである。遺物は非ロクロ土師器と礫石器が埋土から出土している。第13図1は小型丸底の鉢で、体部は内湾し、口縁部は外傾する。調整は外面ではヘラナデの後、全体に丁寧なヘラミガキ、内面ではヘラナデの後、口縁部はヘラミガキが施される。また内外面ともに赤彩が施される。第13図2は小型の鉢で、調整は外面では口縁部にナデ、体部から底部にヘラケズリ、内面にナデが施される。また内外面ともに赤彩が施され、内面では煤が付着している。第13図3は鉢で、体部は内湾する。調整は外面では口縁部にヨコナデ、体部にハケメ、底部にヘラナデ、内面ではヘラナデが施される。第13図4は高環の環部で、口縁部は折り返しか貼付によって肥厚している。調整は外面ではヘラナデとオサエメの後、ヘラミガキ、内面はナデの後、ヘラミガキが施される。第13図8は器台で、調整は外面ではヘラナデ、内面では受部にナデ、脚部にヘラナデが施される。受部には貫通孔が見られ、脚部には透孔が3つ見られる。受部付近の欠損部分で、表面の粘土が剥落した内側に、ハケメが施された面が見られる。第13図5は壺で、口縁部は折り返して肥厚している。調



第12図 SX3613平面図・断面図・遺物微細図

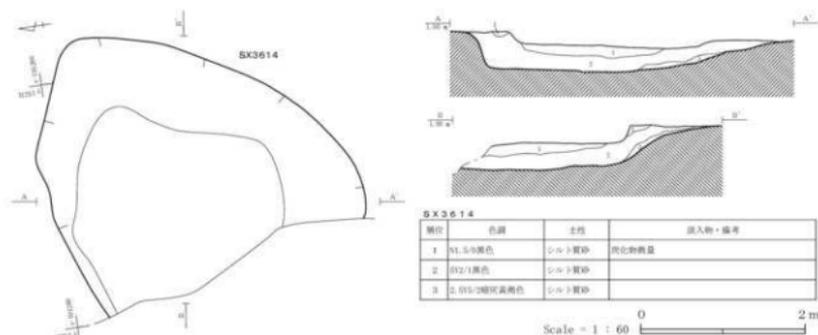
整は外面では口縁部にヨコナデの後、オサエメ、頸部にハケメの後、ヘラミガキ、内面ではハケメの後、口唇部にヨコナデが施される。第13図6は壺で、調整は外面ではハケメの後、ヘラミガキ、底部はヘラナデ、内面ではハケメの後、ヘラナデが施される。外面全体に煤が付着する。第13図7は壺の頸部で、調整は外面ではハケメの後、ヘラミガキ、内面ではヘラナデの後、ヘラミガキが施される。第13図9は扁平な亜角礫を素材とした礫石器で、4面に使用痕が見られる。便宜上使用面をそれぞれa～d面と呼称する。a面は全体に敲打痕があり中央が窪む。また断面V字状の条痕が数本ある。b面は敲打痕のみで、c面との角は敲打痕で潰されている。c面は平坦に近いが、敲打痕があるため中央がやや窪んでいる。この面を下にして置くと安定する。周縁部は摩滅していて、上下端部は摩滅が顕著である。d面との角はやや丸みを帯びる。d面は破断面で、複数回割ったのではなく節理で砕けた様である。c面との角の縁辺だけ摩滅している。全体的に角に使用痕が集中する傾向がある。第13図1～8はその特徴から、古墳時代前期の塩釜式土器と考えられる。第13図2、4～8は埋土4からまよって出土しており、遺構が廢



No	登録番号	遺構名	層位	種別	器種・名称	部位	器高 長さ	口徑 幅	底径 厚さ	長さ	備考	図版番号
1	C-4	SS3613	埋2	赤ロクロ土師器	鉢 平沿ね	完整	3.9	6.9	1.6	-	外面:ヘナナデ(口～底)→ヘラズガキ(口～底) 内面:ヘナナデ(底)→ヘラズガキ(口～底)→ヨコナデ(体) 内外面赤彩	10-8
2	C-5	SS3613	埋4	赤ロクロ土師器	鉢 平沿ね	完整	4.0	6.7	2.9	-	外面:ナデ(口)→ヘラズガキ(体～底) 内面:ナデ(口～底) 内外面赤彩 内面体～底部黒行着	10-9
3	C-7	SS3613	埋2	赤ロクロ土師器	鉢	体部～底部	残存 3.3	-	3.0	-	外面:ハケメ(体)→ハケメ(体上) 内面:ヘナナデ(口～底) 底外:ナデ	10-10
4	C-6	SS3613	埋4	赤ロクロ土師器	高杯 平沿ね	口縁部～ 胴上部	残存 4.6	5.5	-	-	外面:ヘナナデ(胴上)→ヘラズガキ(口～胴上) 内面:ナデ(体下)→ヘラズガキ(口～底) 複合口縁	10-11
5	C-9	SS3613	埋3	赤ロクロ土師器	甌	口縁部～ 胴部	残存 3.7	-	-	-	外面:ハケメ(口)→ヘラズガキ(胴)→ヨコナデ(口)→オサエメ(口) 内面:ハケメ(口～胴)→ヨコナデ(口甌) 複合口縁	10-12
6	C-10	SS3613	埋4	赤ロクロ土師器	甌	体部～底部	残存 21.1	-	9.8	-	外面:ハケメ(体)→ヘラズガキ(体)→ヘナナデ(体下) 内面:ハケメ(体下)→ヘナナデ(体) 底外:ヘナナデ 底内:未調査 外面全体に黒行着	10-13
7	C-37	SS3613	埋3	赤ロクロ土師器	甌	胴部	残存 3.6	-	-	-	外面:ハケメ(胴)→ヘラズガキ(胴) 内面:ヘナナデ(胴下)→ナデ(胴上)	10-14
8	C-8	SS3613	埋3	赤ロクロ土師器	甌	胴上部	残存 6.7	-	-	-	外面:ヘナナデ(体上) 内面:ナデ(受部)→ヘナナデ(胴部内面)→貫通孔(縁合部) 透れ孔のうち2孔残存 縁合部外面に黒漆粘土あり	10-15
9	K-12	SS3613	埋3	観石器	-	-	残存 13.1	15.7	5.2	1503	断面:敲打痕・染着・擦痕が認められる。 砂岩 方角石か?	10-16

第13図 SX3613出土遺物

単位はcm( )の数値は復元値



第14図 SX3614平面図・断面図

絶した直後に廃棄されたと考えられる。このことからSX3613の時期は古墳時代前期と推定される。

**SX3614** (第14図、第5表、写真図版3) OO-019cdGridに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形はU字状の遺構である。西側は攪乱に切られる。埋土は中央部分が最も黒く、端に向かうに連れて薄くなり地山との境が不明瞭になる。大きさは、3.01m以上×3.35mで、深さは0.56mである。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物が出土していないため、SX3614の詳しい時期は不明である。

**SX3615** (第5表) OO-019a・OO-020bGridに位置する。平面形は不整楕円形である。Ⅱ層上面遺構のSK3601と重複関係がある。大きさは、2.18m×1.14mで、深さは0.38mである。遺物は弥生土器と非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がいないため、SX3615の詳しい時期は不明である。

### (3) ビット (第6表)

Ⅲ層上面では3基検出した。柱痕跡は見られない。遺物が出土していないため、ビットの詳しい時期は不明である。

## 2. Ⅱ層上面遺構

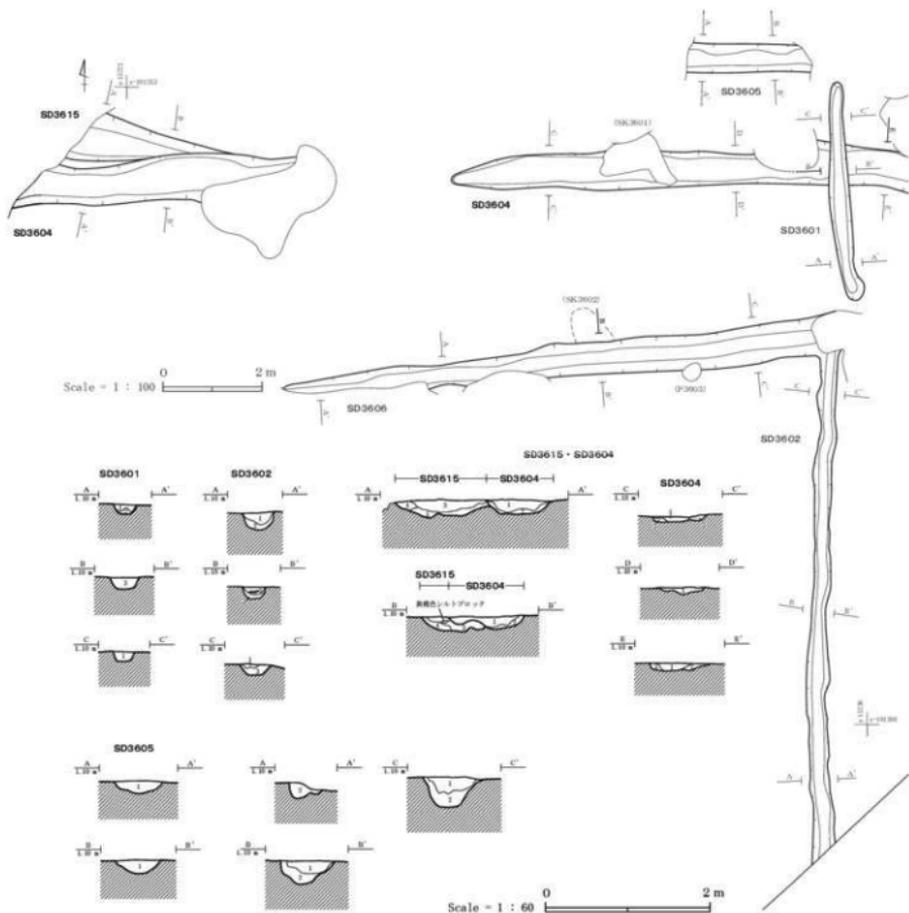
### (1) SD溝跡

**SD3601** (第16図、第3表、写真図版5) OO-018a・OP-018dGridに位置する。南北方向の溝で、主軸方位はN-2°-Wである。検出長4.46m、上端幅0.29~0.34m、深さ0.12~0.15mである。断面形はU字状である。Ⅱ層上面遺構のSD3604と新旧関係があり、SD3604より新しい。底面は平坦で勾配も見られない。遺物が出土していないため、SD3601の詳しい時期は不明である。

**SD3602** (第16・18図、第3表、写真図版5・6) OO-018ad・019c・ON-018a・019BGridに位置する。南北方向の溝で、主軸方位はN-1°-Eである。検出長10.69m、上端幅0.26~0.38m、深さ0.15~0.23mである。断面形はU字状である。Ⅲ層上面遺構のSX3604と重複関係がある。北側は攪乱に切られ、SD3606との新旧関係は不明である。南側は調査区外へ続く。底面は平坦で勾配も見られない。遺物は土師器、陶器、骨が埋土から出土している。第18図1は常滑の鉢の底部である。底面出土遺物がいないため、SD3602の詳しい時期は不明である。

**SD3603** (第3表) OO-019a・OO-020bGridに位置する。検出長3.58m、上端幅0.61m、深さ0.11mである。Ⅱ層上面遺構のSD3606、SK3601と新旧関係があり、SD3606、SK3601より古い。北側を攪乱に切られる。遺物は弥生土器と非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がいないため、SD3603の詳しい時期は不明である。

**SD3604** (第16・18図、第3表、写真図版6) OO-018a・019ab・020ab・OP-018d・019cd・020cd



層位	色調	土性	遺入物・備考
1	10YR2/3黒褐色	シルト質砂	黄褐色砂ブロック無残量、暗褐色砂痕状
2	10YR3/3暗褐色	シルト質砂	黒褐色砂、黄褐色砂痕状
3	10YR2/3黒褐色	シルト質砂	暗褐色砂痕状

層位	色調	土性	遺入物・備考
1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	炭分粒子少量、炭化物粒子粒痕量
2	10YR3/3暗褐色	シルト質砂	黄褐色砂痕状
3	2.5Y4/2暗灰黄色	シルト質砂	黄褐色砂痕状

層位	色調	土性	遺入物・備考
1	10YR2/3黒褐色	シルト質砂	黄褐色砂痕状
2	2.5Y5/2暗灰黄色	シルト質砂	黒褐色砂、暗褐色砂痕状
3	10YR2/3黒褐色	シルト質砂	黄褐色砂痕状
4	10YR4/2.5黄褐色	シルト質砂	黒褐色砂痕状
5	2.5Y5/2暗灰黄色	シルト質砂	黒褐色砂、暗褐色砂痕状
6	10YR4/2黄褐色	シルト質砂	黄褐色砂痕状

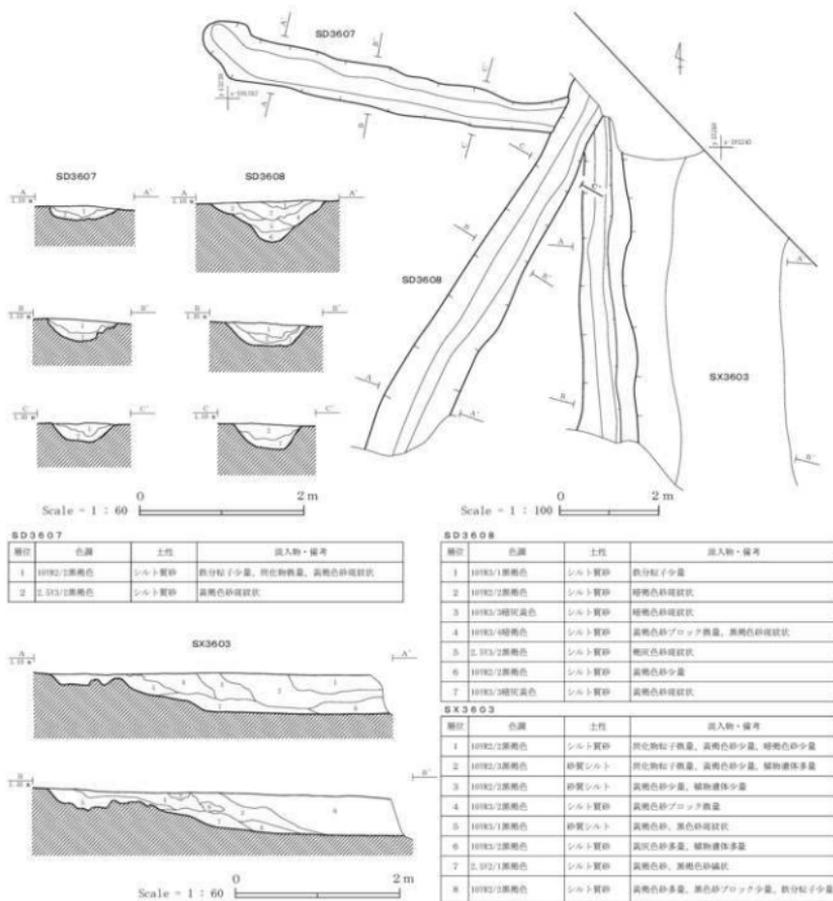
層位	色調	土性	遺入物・備考
1	10YR3/3暗褐色	シルト質砂	暗褐色砂痕状

層位	色調	土性	遺入物・備考
1	10YR2/3黒褐色	シルト質砂	炭分粒子少量、炭化物無残量、暗褐色砂痕状
2	2.5Y4/2暗灰黄色	シルト質砂	黄褐色砂痕状

第16図 II層上面SD溝跡平面図・断面図(1)

Gridに位置する。東西方向の溝で、主軸方位はN-89°-Eである。検出長18.22m、上端幅0.59~0.87m、深さ0.08~0.16mである。断面形は皿状である。Ⅱ層上面遺構のSD3601・15、SX3601、SX3602と新旧関係があり、SD3601・15、SX3601、SX3602より古い。東側は攪乱で、OP-019d付近は攪乱で削平されている。底面は平坦で勾配も見られない。遺物は弥生土器、土師器、磁器が埋土から出土している。第18図2は肥前産の瓶で、染付けの花文が施され、断面に漆継ぎの跡が残っている。第18図2の時期は1750~1790年である。底面出土遺物がないため、SD3604の詳しい時期は不明であるが、埋土から18世紀後半の磁器が出土しているため、18世紀後半以降と考えられる。

**SD3605** (第16図、第3表、写真図版6) OP-019cGridに位置する。東西方向の溝で、主軸方位はN-90°-Eである。検出長2.56m、上端幅0.56~0.59m、深さ0.15~0.17mである。断面形はU字状である。東西は攪乱に切られる。底面はやや起伏していて、勾配は見られない。遺物が出土してい

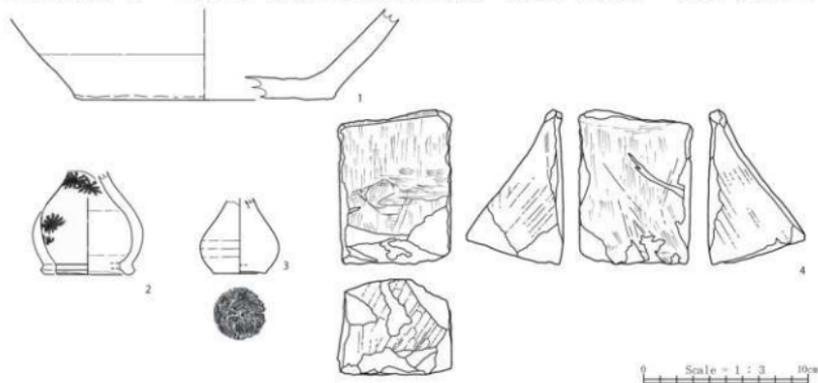


第17図 Ⅱ層上面SD溝跡平面図・断面図(2)

ないため、SD3605の詳しい時期は不明である。

**SD3606** (第16図、第3表、写真図版6) OO-018a・019ab・020bGridに位置する。東西方向の溝で、主軸方位はN-84°-Eである。検出長11.27m、上端幅0.40~0.70m、深さ0.18~0.37mである。断面形はU字状である。II層上面遺構のSK3602、SD3603、P3603、SD3602と新旧関係があり、SK3602、SD3603、P3603より新しい。SD3602との新旧関係は不明である。東西は攪乱に切られる。底面は起伏がなく、西から東に下り勾配になっている。遺物は陶器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SD3606の詳しい時期は不明である。

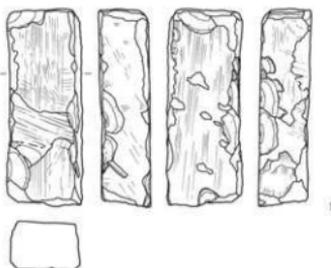
**SD3607** (第17・18図、第3表、写真図版7) OQ-018cdGridに位置する。東西方向の溝で、主軸方位はN-79°-Wである。検出長7.41m、上端幅0.78~0.84m、深さ0.17~0.28mである。断



No	登録番号	遺構名	層位	種別	器種・名称	部位	器高 長さ	口徑 幅	底径 厚さ	重さ	備考	図版番号
1	I-25	SD3602	埋土	陶器	鉢	体下部~底部	残存 5.6	15.4	-	-	内面が使用痕により摩滅していることから、器鉢に転用か? 常陸林遺跡	10-17
2	J-26	SD3604	埋土	磁器	瓶	胴部~高台部	残存 6.4	-	(5.3)	-	ロクロ 削り出し高台 外面:松文 透継 肥後産 1790~1790年	10-18
3	G-3	SD3607	埋土	土師質 土器	瓶	胴部~底部	残存 4.6	-	3.2	-	外面:ロクロナゲ(体部) 逆外:左回転糸切り	10-19
4	K-27	SD3608	埋土	石製品	砥石	-	残存 9.5	8.0	5.9	403	使用面:上面 両側面と下面にタガヤ痕残存 上:土砥 砥灰岩	10-20

第18図 II層上面SD溝跡出土遺物

単位はcm(g)の数値は復元値



No	登録番号	遺構名	層位	種別	器種・名称	部位	器高 長さ	口徑 幅	底径 厚さ	重さ	備考	図版番号
1	K-28	SX3603	埋土	石製品	砥石	-	12.2	4.6	3.2	311	使用面:上面 瓦砥 砥灰質砂岩	10-21

第19図 SX3603出土遺物

単位はcm(g)の数値は復元値

面形はU字状である。Ⅱ層上面遺構のSD3608と新旧関係があり、SD3608より古い。底面は起伏がなく、西から東に向かって下り勾配になっている。遺物は非ロクロ土師器と土師質土器が埋土から出土している。第18図3は土師質土器の瓶で、調整はロクロナデ、底部には左回転糸切り痕がある。底面出土遺物がないため、SD3607の詳しい時期は不明である。

**SD3608** (第17・18図、第3表、写真図版7) OP-018b・OQ-017d・018cGridに位置する。南北方向の溝で、主軸方位はN-30°-Eである。検出長9.41m、上端幅0.80～0.99m、深さ0.29～0.51mである。断面形はU字状である。Ⅱ層上面遺構のSD3607、とSX3603と新旧関係があり、SD3607とSX3603より新しい。南北は攪乱に切られる。底面は起伏がなく、北から南に向かって下り勾配になっている。遺物は弥生土器、非ロクロ土師器、石製品が埋土から出土している。第18図4は凝灰岩製の砥石で、使用面は2面である。底面出土遺物がないため、SD3608の詳しい時期は不明である。

**SD3609** (第3表) OP-019bGridに位置する。東西方向の溝で、主軸方位はN-59°-Wである。検出長1.59m、上端幅0.76m、深さ0.22mである。Ⅱ層上面遺構のP3618と新旧関係があり、P3618より古い。南北は攪乱に切られる。遺物は弥生土器と非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SD3609の詳しい時期は不明である。

**SD3612** (第3表) OP-019b・OQ-019cGridに位置する。L字状の溝で主軸方位はN-2°-WとN-87°-Eである。検出長5.20m、上端幅1.18m以上、深さ0.44～0.46mである。Ⅲ層上面遺構のSX3608と重複関係がある。北側と東側は攪乱に切られる。確認面ではSX3608の埋土と差がなく、東側の一部はSX3608として掘削してしまった。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SD3612の詳しい時期は不明である。

**SD3615** (第3表) OP-020cdGridに位置する。東西方向の溝で、主軸方位はN-77°-Wである。検出長4.45m、上端幅1.12m、深さ0.16～0.18mである。Ⅱ層上面遺構のSD3604と新旧関係があり、SD3604より古い。西側は攪乱に切られる。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SD3615の詳しい時期は不明である。

## (2) SK土坑

**SK3601** (第4表) OO-019a・OO-020b Gridに位置する。平面形は楕円形である。SD3603、SX3615を切る。大きさは、0.92m×0.74mで、深さは0.23mである。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SK3601の詳しい時期は不明である。

**SK3602** (第4表) OO-019ab Gridに位置する。平面形は楕円形である。SD3606に切られる。大きさは、1.05m以上×0.67mで、深さは0.15mである。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SK3602の詳しい時期は不明である。

**SK3603** (第4表) OP-018dGridに位置する。平面形は楕円形である。大きさは、0.95m×0.51mで、深さは0.23mである。遺物が出土していないため、SK3603の詳しい時期は不明である。

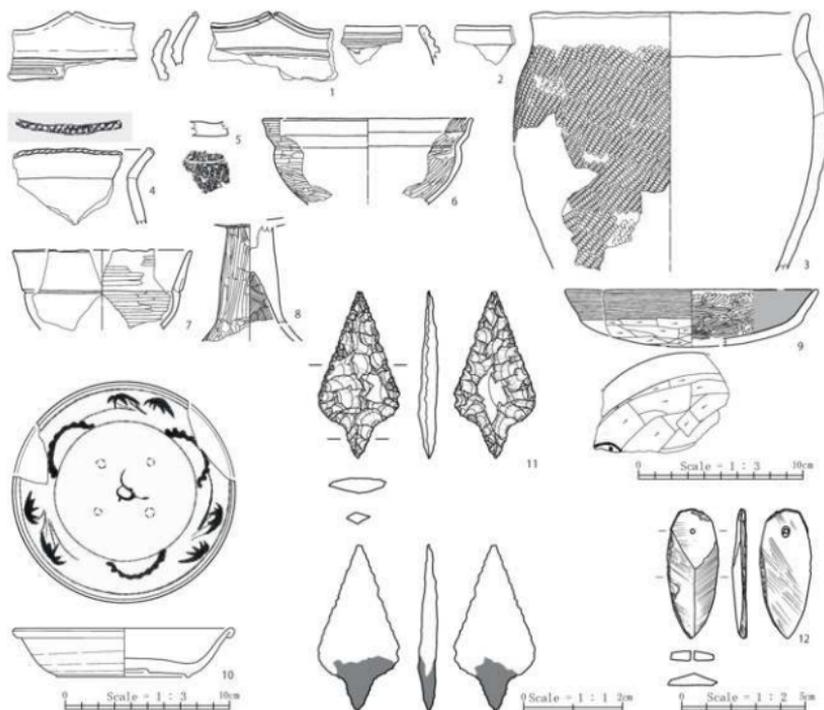
**SK3604** (第4表) OO-019b Gridに位置する。平面形は不整隅丸方形である。大きさは、0.96m×0.84mで、深さは0.19mである。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SK3604の詳しい時期は不明である。

**SK3605** (第4表) OO-019b Gridに位置する。平面形は不整形である。大きさは、0.99m×0.81mで、深さは0.30mである。遺物が出土していないため、SK3605の詳しい時期は不明である。

**SK3606** (第4表) OP-020c Gridに位置する。平面形は円形である。大きさは、0.76m×0.68mで、深さは0.13mである。遺物が出土していないため、SK3606の詳しい時期は不明である。

**SK3607** (第4表) OP-019a Gridに位置する。平面形は円形である。大きさは、1.18m×0.88mで、深さは0.39mである。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SK3607の詳しい時期は不明である。

**SK3608** (第4表) OP-018d Gridに位置する。平面形は楕円形である。大きさは、1.14m×0.42m



No	登録番号	遺構名	層位	種別	器種・名称	部位	器高 長さ	口徑 幅	底径 厚さ	重量	備考	図版番号
1	A-21	SK3604	II層	縄文土器	高柄小 次鉢	口縁部	残存 4.3	-	-	-	底状口縁。波瀾部に菊み。 外面:沈線(口)→ヨコナデ(口)→ヘラミガキ(口) 内面:ヘラミガキ(口)→沈線(口唇)→沈線(口)	10-22
2	B-18	SK3608	II層	弥生土器	無須直	口縁部	残存 2.4	-	-	-	外面:ヨコナデ(口)→ヘラミガキ(口)→沈線(口) 内面:輪帯ス→ヘラミガキ(口)	10-23
3	B-11	SK3608	II層	弥生土器	甕	口縁部へ 体部	残存 15.9	(17.0)	-	-	外面:ヘラミガキ(口)→福部(波瀾文)(体) 内面:ヘラミガキ(口～体)	10-24
4	B-40	SD3608	II層	弥生土器	甕	口縁部へ 体部	残存 4.6	-	-	-	外面:ナデ(口～体) 内面:ナデ(口～体) 内面体部に黒付着・口唇部に原体(波瀾文)圧痕	10-25
5	B-38	SD3612	II層	弥生土器	製塩土器	底部	残存 0.9	-	-	-	外面:ナデ(体下) 内面:ヘラミガキ(底) 底外:木炭層	10-26
6	C-29	OF018d	III層	赤ロクロ 土師器	鉢	口縁部 へ体部	残存 5.3	(12.8)	-	-	外面:ナケミ(体部)→ヨコナデ(口)→ヘラミガキ(口～体) 内面:ナケミ(口)→ヘラミガキ(口～体)	10-27
7	C-39	SD3604	II層	赤ロクロ 土師器	鉢	口縁部へ 体部	残存 4.9	(10.9)	-	-	外面:黒漆するがヘラミガキの痕跡が残る 内面:ヘラミガキ(口～体) 内面口縁部赤赤・体部黒付着・二重口縁	10-28
8	C-30	SK3603	II層	赤ロクロ 土師器	高杯	井下部 へ柱状部	残存 7.6	-	-	-	外面:ヘラミガキ(井下)→ヘラミガキ(柱) 内面:ヘラミガキ(井下)→ヘラミガキ(柱)	10-29
9	C-15	SK3608	II層	赤ロクロ 土師器	坪	口縁部へ 底部	3.5	(15.4)	-	-	外面:ヘラミガキ(底)→ヨコナデ(口) 内面:ヘラミガキ(口～底)→黒色処理 外面体部に黒着	10-30
10	J-13	雑瓦	雑瓦	磁器	小・中瓦	口縁部へ 底部	3.0	13.1	8.0	-	口外:内面(黒付竹文 草込千鳥文 目跡4箇所) 口縁部玉縁 粒ノ目回型高台 切込地 19C中環(墓末カ)	10-31
11	K-1	雑瓦	雑瓦	石器	石鏃	先端部欠損	残存 2.4	1.7	0.3	1.3	有葉式石鏃 玉鏃(馬鹿) 基部にメスツル付着	10-32
12	K-2	OM019a	III層	石製品	石製焼遺品	尖形	5.3	2.1	0.5	1.9	細形 滑石片岩 基部台形 片面Y状痕	10-33

第20図 その他の出土遺物

単位はcm(g)の数はグラム値

で、深さは0.24mである。遺物が出土していないため、SK3608の詳しい時期は不明である。

### (3) SX性格不明遺構

**SX3601** (第5表) OP-019c Gridに位置する。SD3604を切り、北側は攪乱に切られる。大きさは、1.29m×1.20mで、深さは0.12mである。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SX3601の詳しい時期は不明である。

**SX3602** (第5表) OP-018d Gridに位置する。SD3604を切り、南北は攪乱に切られる。大きさは、2.04m×1.52mで、深さは0.22mである。遺物は非ロクロ土師器が埋土から出土している。底面出土遺物がないため、SX3602の詳しい時期は不明である。

**SX3603** (第17・19図、第5表、写真図版7) OP-017ab・OQ-017d Gridに位置する。北側は調査区外へ続き、東側と南側は攪乱に切られるため平面形は不明である。Ⅱ層上面遺構のSD3608と新旧関係があり、SD3608より古い。大きさは、7.49m以上×6.60m以上で、深さは0.57mである。床面は起伏していて、西側には溝状の落ち込みがある。遺物は弥生土器、非ロクロ土師器、石製品が埋土から出土している。第19図1は凝灰質砂岩製の砥石で、使用面は4面である。全面の角に、磨面を切る剥離が多数確認されることから、砥石としての使用後に何らかの転用が想定される。底面出土遺物がないため、SX3603の詳しい時期は不明である。

**SX3605** (第5表) OP-020c Gridに位置する。平面形は楕円形である。大きさは、1.01m×0.30mで、深さは0.18mである。遺物が出土していないため、SX3605の詳しい時期は不明である。

**SX3606** (第5表) OP-020c Gridに位置する。平面形は楕円形である。大きさは、0.96m×0.19mで、深さは0.13mである。遺物が出土していないため、SX3606の詳しい時期は不明である。

## 3. その他の出土遺物

遺構外出土遺物と、遺構内出土だが遺構の時期とは異なる遺物を計13点図化した。

### (1) 縄文土器

第20図1は波状口縁を呈し、口縁部に工字文あるいは匹字文を施文している。時期は、晩期後葉～末葉である。外面は沈線の上部を削って薄くしているため、下部の沈線の間が隆帯状になっている。

### (2) 弥生土器

第20図2は無頸壺の口縁部分である。第20図3は甕で、調整は外面では口縁部にヘラミガキ、体部に単節LRの縄文、内面ではヘラミガキが施される。第20図2・3の時期は前期～中期前葉と考えられる。第20図4は甕で、口唇部にLRの縄文が施文される。また内面に煤が付着する。時期は後期である。第20図5は製塩土器と考えられ、内面はミガキが施され、底部に木炭痕がある。底径は7～9cm程度である。時期は中期前葉と考えられる。

### (3) 非ロクロ土師器

第20図6は鉢で、体部は内湾し、口縁部は大きく外傾した後、屈曲して稜を作りやや上方に立ち上がる。調整は外面では体部にハケメの後、ヘラミガキ、口縁部にヨコナデ、内面ではハケメの後、ヘラミガキが施される。第20図7は鉢で、体部は内湾し、口縁部はやや外傾する。外面は剥落しているが、体部にハケメ調整の痕が僅かに残る。内面ではヘラミガキが施される。また内面口縁部に赤彩、体部に煤が付着する。第20図8は高環の柱状中空の脚部で、調整は外面ではヘラミガキ、内面では環部にヘラミガキ、脚部にヘラケズリの後、ヘラナデが施される。また内外面ともに赤彩が施される。杯部との接合部に、接合のための凹部がある。第20図6～8は塩釜式土器と考えられる。第20図9は坏で、体部はやや内湾しながら立ち上がり、内外面に段を作り、直立気味に外傾する。調整は外面では底部にヘラケズリ、口縁部にヨコナデ、内面ではヘラミガキの後、黒色処理が施される。また底部外面には判読不明ながら墨書が認められる。時期は古墳時代後期である。

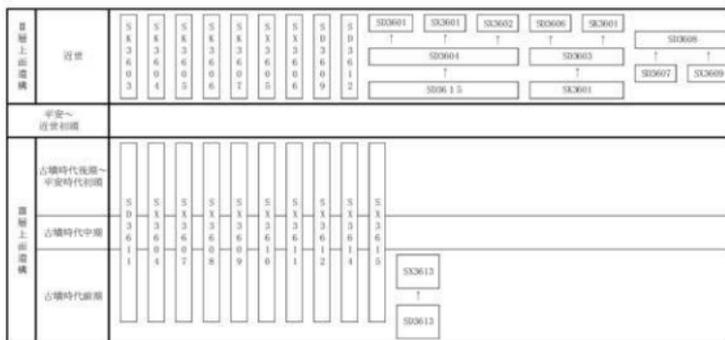
### (4) 磁器

第20図10は切込焼の皿で、染付けの雪輪に竹文と見込に千鳥文が描かれる。時期は19C中頃と

考えられる。

(5) 石器・石製模造品

第20図11は玉髓製の有茎式石鎌で、基部にアスファルトが付着している。第20図12は滑石片岩製の剣形の石製模造品で、一部欠損している。基部は台形で、片面にY字の鋸を作る。



第21図 沼向遺跡第36次調査A区検出遺構新旧関係模式図

## 第3章 第36次調査B区

### 第1節 調査概要

#### 1. B区概要

B区の調査期間は9月18日～11月6日で、調査面積は141 m<sup>2</sup>である。検出した遺構は計12基で、その内訳はⅡ層上面遺構が溝1条、ピット3基、性格不明遺構2基、Ⅲ層上面遺構がピット3基、性格不明遺構3基である。B区ではⅡ層がないため、Ⅲ層上面でⅡ層上面遺構を検出した。また遺構から遺物が全く出土せず、時期判断は埋土の特徴から行った。そのためB区の遺構の詳しい時期は不明である。遺構確認面の標高は約0.60～0.90 mである。

#### 2. 基本層序

B区では西壁で基本層序の観察を行い、Ⅰa層・Ⅲa層・Ⅲb層・Ⅲc層・Ⅲd層・Ⅲe層・Ⅲf層・Ⅲg層を確認した。調査区の南側のD-07・E-07ではⅢe層が厚く安定して堆積していたが、調査区の北側ではⅢe層が不明瞭である。遺構を検出できたのは、主にこのⅢe層が厚く堆積していた部分である。

Ⅰ層 Ⅰa層を確認した。

Ⅰa層 黒褐色砂質シルトからなる。現代の耕作土。

Ⅲ層 Ⅲa層・Ⅲb層・Ⅲc層・Ⅲd層・Ⅲe層・Ⅲf層・Ⅲg層を確認した。

Ⅲa層 黒褐色シルト質砂からなり、層厚は10～40cmである。炭化物粒子少量、黄褐色ブロック微量、所々黄褐色砂を斑文状に含む。

Ⅲb層 黒褐色砂質シルトからなり、層厚は8～20cmである。炭化物粒子微量、黒色シルトブロック微量、暗灰黄色砂を斑文状に含む。

Ⅲc層 黒褐色シルト質砂からなり、層厚は6～10cmである。黒色砂を斑文状に含む。

Ⅲd層 黒色シルト質砂からなり、層厚4～16cmである。暗灰黄色砂を斑文状に含む。

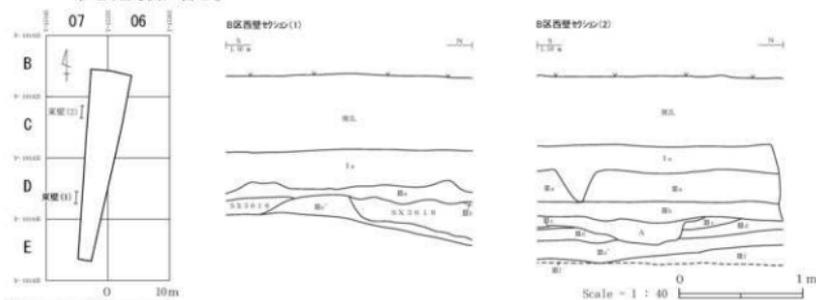
Ⅲe層 暗オリーブ褐色シルト質砂からなる。暗褐色砂と黒褐色砂を斑文状に含む。

Ⅲe'層 暗灰黄色シルト質砂からなり、層厚は6～20cmである。酸化鉄微量、にぶい黄褐色粘土ブロック微量、黒褐色砂を斑文状に含む。上下の層との関係からⅢe層に分類したが、色調や土質が異なるためⅢe層ではない可能性も考えられる。

Ⅲf層 黒褐色シルト質砂からなり、層厚は6～20cmである。暗灰黄色砂を斑文状に含む。

Ⅲg層 暗灰黄色シルト質砂からなり、層厚は20cm以上である。

A層 黒色砂質シルトからなる。にぶい黄褐色粘土ブロック少量、炭化物微量、暗灰黄色砂を斑文状に含む。



第22図 第36次調査B区西壁基本土層断面位置図・土層断面図

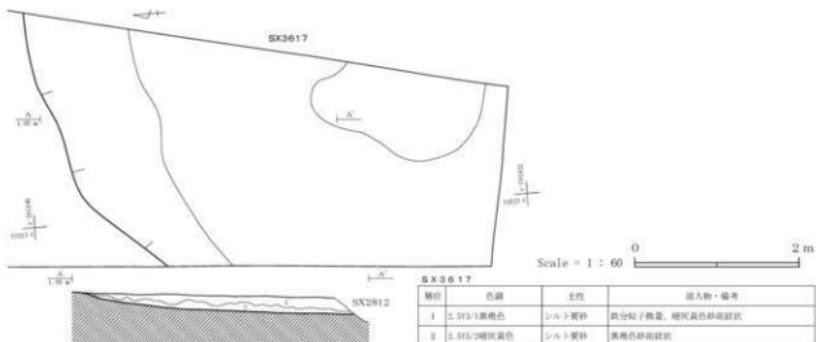
## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 1. Ⅲ層上面遺構

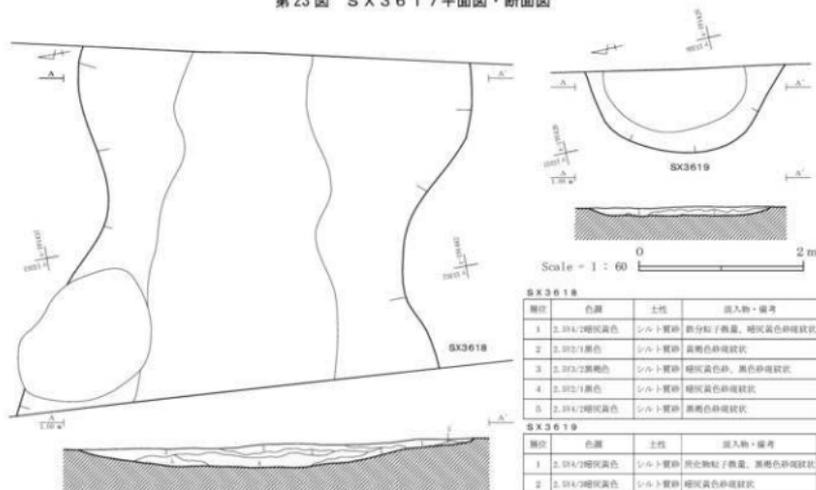
#### (1) SX性格不明遺構

**SX3617** (第23図、第4表、写真図版8) E-07bcGridに位置する。Ⅱ層上面遺構のSX2812と重複関係がある。調査区外へ続くため平面形は不明で、断面形は皿状、底面は平坦である。大きさは、5.55m以上×3.04m以上で、深さは0.23mである。遺物は出土しておらず、SX3617の詳しい時期は不明である。

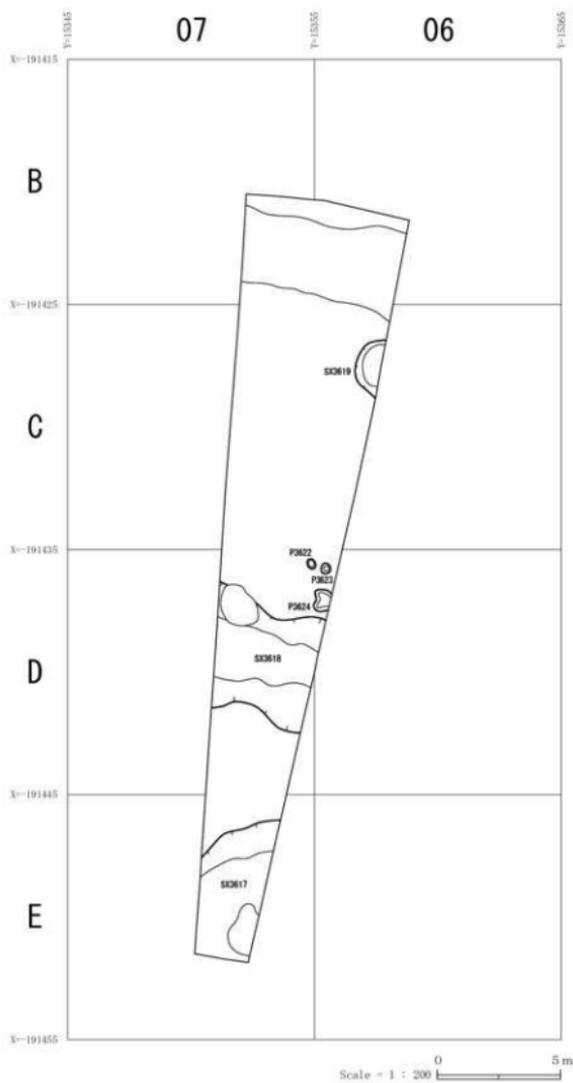
**SX3618** (第24図、第4表、写真図版8) D-06a・07bcGridに位置する。東西は調査区外へ続く。平面形は不整形で、断面形は皿状、底面は平坦である。大きさは、4.39m以上×4.40mで、深さは0.57m



第23図 SX3617平面図・断面図



第24図 SX3618・3619平面図・断面図



第 25 图 B 区Ⅲ层上面遗構全体图

である。遺物は出土しておらず、S X 3618 の詳しい時期は不明である。

S X 3 6 1 9 (第 24 図、第 4 表、写真図版 8) C -06aGrid に位置する。東側は調査区外へ続く。平面形は円形と推測される。断面形は U 字状、底面は平坦である。大きさは、2.50m 以上 × 1.09m 以上で、深さは 0.11m である。遺物は出土しておらず、S X 3619 の詳しい時期は不明である。

## (2) ピット (第 6 表)

3 基検出した。P3624 で砥石が出土している。P3624 以外では、遺物は出土していない。

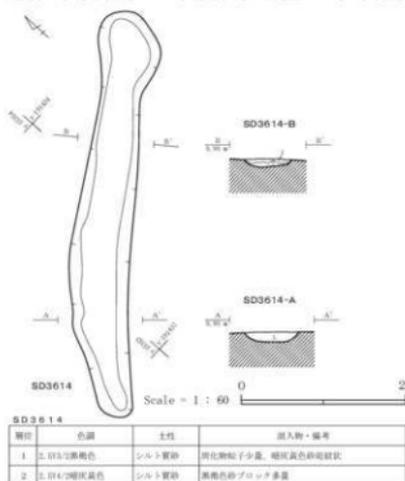
## 2. II 層上面遺構

### (1) SD 溝跡

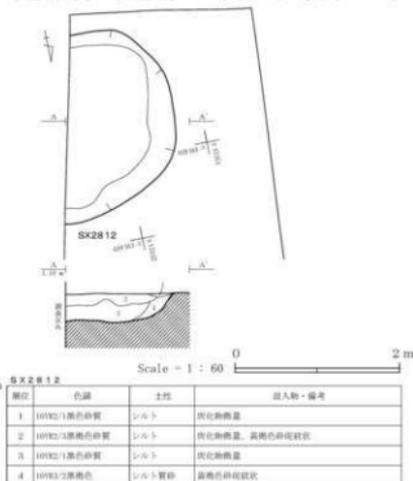
S D 3 6 1 4 (第 26 図、第 3 表、写真図版 9) C -06d・07c・D -07abGrid に位置する。東西方向の溝で、主軸方位は N -49° - E である。断面形は U 字状で、底面はほぼ平坦で、傾斜は見られない。検出長 4.96m、上端幅 0.55 ~ 0.63m、深さ 0.12m である。遺物は出土していない。

### (2) S X 性格不明遺構

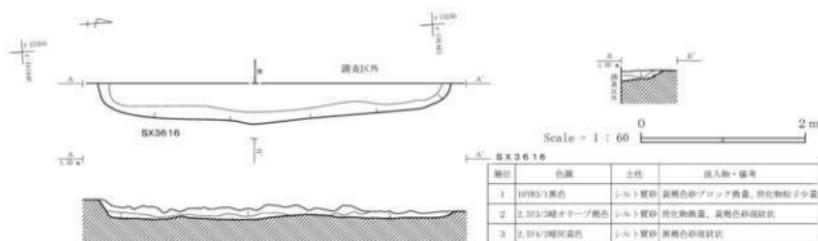
S X 2 8 1 2 (第 27 図、第 5 表、写真図版 9) E -07bcGrid に位置する。第 2 8 次調査区から続く遺構で、本調査区では西側半分を調査した。平面形は不整形円形で、断面形は U 字状である。大きさは、



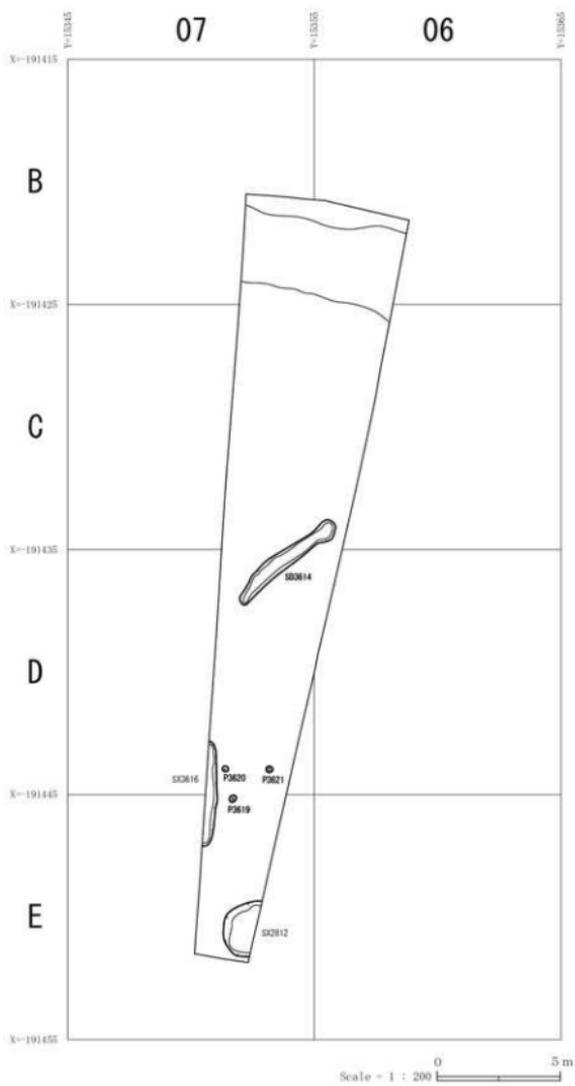
第 26 図 SD 3 6 1 4 平面図・断面図



第 27 図 S X 2 8 1 2 平面図・断面図



第 28 図 S X 3 6 1 6 平面図・断面図



第 29 图 B区Ⅱ层上面遗構全体图

2.30m×1.30m以上で、深さは0.34mである。遺物は出土していないが、底面付近から自然木が出土している。

S X 3 6 1 6 (第28図、第5表、写真図版9) D-07c・E-07bGridに位置する。西側は調査区外へ続いたため、平面形は不明である。断面形は皿状である。大きさは、3.25m×0.50m以上で、深さは0.24mである。遺物は出土していない。

(3) ビット (第6表)

3基検出した。遺物は出土していない。

目録 上面 遺構	近世	S D 3 6 1 4	S X 2 2 8 1 2	S X 3 6 1 6
		字室～ 近世初頭		
目録 上面 遺構	古墳時代前期～ 平安時代初期	S X 3 6 1 7	S X 3 6 1 8	S X 3 6 1 9

第30図 沼向遺跡第36次調査B区検出遺構新旧関係模式図

第2表 沼向遺跡第36次調査出土遺物一覧表

遺構名	調査区	縄文土器 弥生土器	土師器		須恵器	土師質土器	陶器	磁器	石器	石製品	縄	骨	計
			丹波口口	口口口口									
SD002	AIC						1	2	1			1	6
SD003	AIC	2	1										3
SD004	AIC	1	4				1						6
SD006	AIC						1						1
SD007	AIC	1	4		1			1					7
SD008	AIC	1	14							1			16
SD009	AIC	9	7										16
SD012	AIC		12								2		14
SD015	AIC		1								2		3
SD001	AIC		2										2
SD002	AIC		1										1
SD004	AIC		2										2
SD007	AIC		1										1
SD001	AIC		1								1		2
SD002	AIC	29									1		30
SD003	AIC	5	26		1			2		1			45
SD004	AIC	3	86	1						1	4		55
SD007	AIC	3	18										21
SD008	AIC	17	147					1		1	2		168
SD009	AIC		1										1
SD010	AIC		2										2
SD012	AIC	1	11										12
SD013	AIC	3	160							1	2		166
SD014	AIC		1										1
SD015	AIC	1	9										10
SD008・SD012	AIC		53										53
P-3018	AIC		3										3
P-3024	BIC									1			1
00-018a	AIC		1				1						2
00-018b	AIC		1										1
00-019a	AIC				3		1						4
00-019b	AIC		5				3	1					9
00-019d	AIC							1					1
00-019e	AIC							1					1
00-019c	AIC		1		1	1			1				3
00-019d	AIC		2										2
00-019b	AIC		1										1
00-019d	AIC				3			3					6
00-019d	AIC		6										6
00-019d	AIC							2					2
00-019b	AIC						2						2
00-019b	AIC		12										12
00-020b	AIC		2		1		2						5
基本層他	AIC		37		12		28	1					78
基本層他	BIC				2			1				2	5
合計		76	606	1	23	2	43	13	1	6	16	1	788

第3表 第36次調査A区・B区SD溝跡観察表

遺構番号	調査区	G r i d	長軸方向	長径(m)×短径(m)×深さ(m)	底面積高(m)	平面形	断面形	底面	時期
SD3601	A区	00-018a-0P-018d	N-2°	4.46×0.29×0.34×0.12×0.15	0.84-0.88	直線	U字状	平坦	近世
SD3602	A区	00-018a-0P-019c-0P-018a-0S-018b	N-1°	10.69×0.26×0.38×0.15-0.23	0.77-0.83	直線	U字状	平坦	近世
SD3603	A区	00-018a-0P-020b	N-3°	3.58×0.61×0.11	0.81-0.85	直線	U字状	やや起伏	近世
SD3604	A区	00-018a-0P-019a-0P-020ab-0P-018d-0P-019c-0P-020c	N-9°	18.22×0.59×0.87×0.08-0.16	0.85-0.88	直線	蓋状	平坦	近世
SD3605	A区	0P-018c	N-9°	2.56×0.56×0.59×0.15-0.17	0.8	直線	U字状	やや起伏	近世
SD3606	A区	00-018a-0P-019ab-0P-020b	N-84°	11.27×0.40×0.70×0.18-0.37	0.62-0.73	直線	U字状	平坦	近世
SD3607	A区	0Q-018c	N-79°	7.41×0.78×0.84×0.17-0.28	0.75-0.81	直線	U字状	やや起伏	近世
SD3608	A区	0P-018b-0Q-017a-0Q-018c	N-20°	9.41×0.80×0.99×0.29-0.51	0.42-0.57	直線	U字状	平坦	近世
SD3609	A区	0P-018b	N-59°	1.59×0.76×0.22	0.88	直線	U字状	平坦	近世
SD3610	A区	0P-018d	N-50°	1.14×0.42×0.24	0.77	直線	U字状	平坦	近世
SD3611	A区	0P-018b-0Q-018c	N-24°	3.31×0.45×0.62×0.15-0.19	0.83-0.85	直線	U字状	平坦	平安時代初期以前
SD3612	A区	0P-019a-0Q-019c	N-2°	5.2×(1.18)×0.44-0.48	0.88	直線	V字状	平坦	近世
SD3613	A区	00-019a	N-1°	2.02×0.75×0.80×0.10	0.82-0.84	直線	蓋状	平坦	古墳時代中期以前
SD3614	B区	C-06a-C-07c-D-07ab	N-49°	4.96×0.55×0.63×0.12	0.63	直線	U字状	平坦	近世
SD3615	B区	0P-020d	N-77°	4.45×1.12×0.16-0.18	0.84-0.88	直線	U字状	やや起伏	近世

第4表 第36次調査A区・B区SK土坑跡観察表

遺構番号	調査区	G r i d	長軸方向	長径(m)×短径(m)×深さ(m)	平面形	断面形	底面	時期
SK3601	A区	00-019a-0P-020b	N-65°	0.92×0.73×0.23	楕円形	不整形	起伏	近世
SK3602	A区	00-019ab	N-39°	1.05×0.67×0.15	楕円形	U字状	平坦	近世
SK3603	A区	0P-018d	N-31°	0.95×0.51×0.23	楕円形	U字状	平坦	近世
SK3604	A区	00-019b	N-29°	0.96×0.84×0.19	不整形丸方形	U字状	やや起伏	近世
SK3605	A区	00-019b	N-64°	0.99×0.81×0.30	不整形円形	U字状	平坦	近世
SK3606	A区	0P-020c	N-6°	0.76×0.68×0.13	円形	蓋状	やや起伏	近世
SK3607	A区	0P-019a	N-21°	1.18×0.88×0.39	円形	U字状	平坦	近世
SK3608	A区	0P-018d	N-50°	1.14×0.42×0.24	楕円形	U字状	平坦	近世

第5表 第36次調査A区・B区SX性格不明遺構観察表

遺構番号	調査区	G r i d	長軸方向	長径(m)×短径(m)×深さ(m)	平面形	断面形	底面	時期
SX3601	A区	0P-019c	N-54°	1.29×1.2×0.12	不整形	蓋状	起伏	近世
SX3602	A区	0P-018d	N-44°	2.04×1.52×0.22	不整形円形	不整形	やや起伏	近世
SX3603	A区	0P-017ab-0Q-017d	S-8°	7.49×(1.66)×0.57	不明	蓋状ホコ?	起伏	近世
SX3604	A区	0P-018a-0P-019b-0P-018d-0P-019c	N-1°	9.41×(1.47)×0.26	不整形長方形	起伏	古墳前期～平安初期	近世
SX3605	A区	0P-020c	N-61°	1.01×0.39×0.18	楕円形	U字状	平坦	近世
SX3606	A区	0P-020c	N-65°	0.96×0.19×0.13	楕円形	U字状	平坦	近世
SX3607	A区	00-018d	N-42°	1.66×(1.23)×0.18	不整形円形	蓋状	平坦	古墳前期～平安初期
SX3608	A区	0P-019ab-0Q-019c	N-62°	4.68×(4.28)×0.54	不整形円形	蓋状	平坦	古墳前期～平安初期
SX3609	A区	0P-018d	N-36°	(1.84)×(0.62)×0.27	楕円形	楕円蓋状ホコ?	平坦	平安時代初期以前
SX3610	A区	0P-018a-0Q-018c	S-8°	(0.65)×(4.69)×0.20	不明	蓋状ホコ?	平坦	平安時代初期以前
SX3611	A区	00-018a-0P-019b	N-79°	3.72×2.45×0.24	不整形	不整形	起伏	平安時代初期以前
SX3612	A区	0Q-018c	N-65°	4.69×2.13×0.14	不整形	蓋状	平坦	平安時代初期以前
SX3613	A区	00-019a-0P-020a-0P-019ab-0P-020c	N-27°	0.86×(0.60)×0.59	不整形丸方形	U字状	平坦	古墳時代前期
SX3614	A区	00-019c	N-60°	(3.01)×3.25×0.56	不整形円形	U字状	平坦	平安時代初期以前
SX3615	A区	00-019a-0P-020b	N-6°	2.18×1.14×0.58	不整形楕円形	U字状	やや起伏	平安時代初期以前
SX3616	B区	D-07c-F-07b	N-3°	3.25×(0.50)×0.24	方形ホコ?	U字状	平坦	近世
SX3617	B区	E-07bc	不明	(5.55)×(3.04)×0.23	不明	蓋状	平坦	平安時代初期以前
SX3618	B区	D-06a-D-07bc	N-76°	(4.39)×4.40×0.35	不明	蓋状	平坦	平安時代初期以前
SX3619	B区	C-06a	N-13°	(2.56)×(1.09)×0.11	円形	U字状	平坦	平安時代初期以前
SX3621	B区	E-07bc	不明	2.30×(1.30)×0.34	不整形楕円形	U字状	平坦	近世

第6表 第36次調査A区・B区ピット観察表

遺構番号	調査区	G r i d	長軸方向	長径(m)×短径(m)×深さ(m)	平面形	断面形	柱礎	時期
P3601	A区	00-019b	N-76°	0.46×0.32×0.14	不整形円形	U字状	無	近世
P3602	A区	00-020b	N-40°	0.41×0.40×0.31	円形	不整形	無	近世
P3603	A区	00-019b	N-40°	0.41×0.32×0.34	円形	U字状	無	近世
P3604	A区	00-019b	N-44°	0.26×0.25×0.20	円形	U字状	無	近世
P3605	A区	00-019b	N-44°	0.27×0.24×0.26	円形	U字状	無	近世
P3606	A区	00-019b	N-55°	0.27×0.24×0.14	円形	U字状	無	近世
P3607	A区	00-019b	N-43°	0.29×0.23×0.19	円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3608	A区	00-019b	N-35°	0.30×0.26×0.49	円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3609	A区	00-019c	N-88°	0.25×0.22×0.16	円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3610	A区	00-019ab	N-89°	0.43×0.37×0.42	楕円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3611	A区	00-019a	N-15°	0.57×0.39×0.27	楕円形	不整形	無	平安時代初期以前
P3612	A区	00-019b	N-34°	0.43×0.31×0.39	不整形円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3613	A区	00-020b	N-58°	0.23×0.21×0.22	円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3614	A区	00-018a	N-11°	0.21×0.16×0.15	円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3615	A区	00-019b	N-21°	0.38×0.36×0.14	円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3616	A区	00-019b	N-59°	0.56×0.51×0.13	不整形	不整形	無	平安時代初期以前
P3617	A区	0Q-018d	N-40°	0.64×0.57×0.34	円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3618	A区	0P-019b	不明	0.41×(0.23)×0.25	円形ホコ?	U字状	無	近世
P3619	B区	E-07b	N-41°	0.32×0.25×0.23	楕円形	U字状	無	近世
P3620	B区	D-07c	N-65°	0.25×0.23×0.09	円形	U字状	無	近世
P3621	B区	D-07c	N-89°	0.27×0.26×0.09	円形	U字状	無	近世
P3622	B区	D-07b	N-28°	0.48×0.32	楕円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3623	B区	D-06a	N-1°	0.43×0.28	円形	U字状	無	平安時代初期以前
P3624	B区	D-06a	N-21°	0.93×(0.76)	円形ホコ?	U字状	無	平安時代初期以前

## 第4章 まとめ

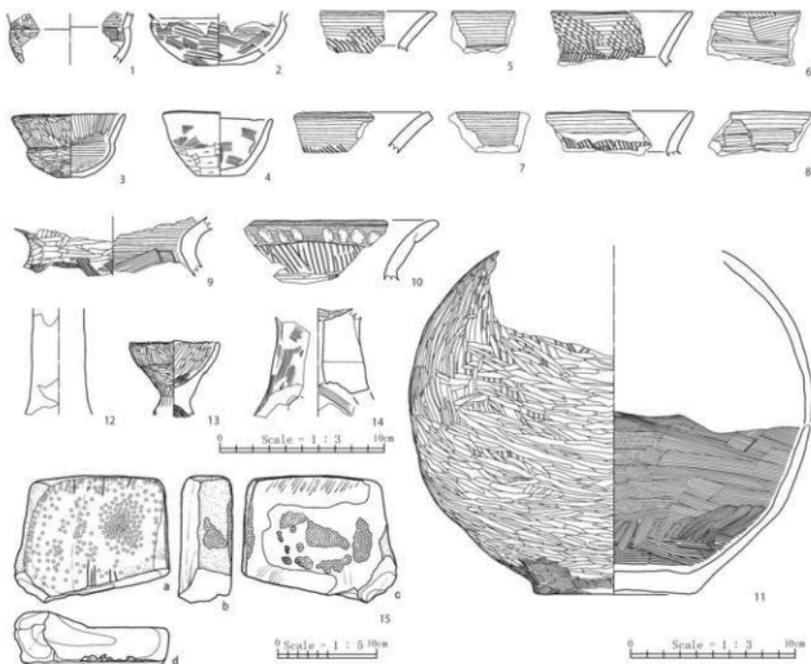
### 第1節 第36次調査A区

A区ではⅢ層上面遺構14基、Ⅱ層上面遺構40基の計54基の遺構を検出した。遺構の残存状況は良好ではなく、一部が残存するだけのものもある。遺物は計788点出土しており、縄文晩期から近世まで幅広い時期にわたる。そのうち約8割にあたる606点が非クロコ土師器である。

#### 1. Ⅲ層上面遺構について

Ⅲ層上面遺構は、平面形が不整形であるものが多い。個々の遺構の時期は、多くが明確でないが、ここでは古墳前期のSX3013、古墳前期～平安時代初頭のSX3604、SX3607、SX3608から出土した塩釜式土器(次山 淳1992、辻 秀人1995、既刊報告書、第4～34次報告書)と礫石器について整理しておきたい。

土師器は、器種に鉢、甕、壺、高環、器台がみられる。鉢は4点(第31図1～4)ある。1～3は小型丸底鉢である。3は、調整が丁寧で、内外面に赤彩が施されている。甕は破片が多く、器形全体がわかるものは少ない。口縁部破片を4点図化している。(第31図5～8)。単純口縁で、体部から「く」の字に



第31図 古墳時代前期の遺物

屈曲して内面に稜を作り外反する。壺は3点ある(第31図9～11)。10は複合口縁である。11は球形の体部で、ハケメののち、丁寧なミガキ調整がなされている。高坏は2点示した(第31図12～13)。12は脚部である。13は手捏ね土器であるが、複合口縁をなしている。器台は1点(第31図14)である。粗製の脚部の破片で、透孔が3つある。

また、SX3613から、古墳時代前期の礫石器(第31図15)が出土している。宮城県の出土例で第31図15に類似する特徴を持つものは、鴻ノ巣遺跡で磨面があるもの、一本松北遺跡で縁辺の角に敲打痕があるものと、平坦面中央部に敲打痕があるものが出土している。これらのことから方割石の可能性も考えられる。(石狩町教育委員会 1977、佐藤信行・須田良平 1998、仙台市教育委員会 2004)

## 2. II層上面遺構について

II層上面遺構は、溝跡が主体である。調査区の全域で検出された。これらの溝は、方向性は直線的であるが、方向は、東西方向、南北方向が多く、北東—南西方向、北西—南東方向もある。SD3607のように屈曲する溝跡もあり、それには区画施設の可能性が考えられる。溝幅は40～80cm、深さ20～40cmで、断面形はU字状を呈するものが多い。埋土には、下部にIII層をブロック状に含む溝跡もあるが、小溝状遺構群としてのまとまりは確認されなかった。

## 第2節 第36次調査B区

B区ではIII層上面遺構6基、II層上面遺構6基の計12基の遺構を検出した。遺物は近世の遺物が3点出土している。隣接する第28次調査では方形周溝墓などが検出されていたが、第36次調査B区では古墳時代の遺構が検出されなかった。

## 第3節 まとめ

沼向遺跡は、これまでの調査で、縄文時代後期中葉から近世にかけての時期幅があり、主に古墳時代前期、古墳時代後期から平安時代初頭、近世に集落が形成されていたことが明らかにされている(既刊報告書、第4～34次報告書)。今回の調査成果としては、古墳時代前期では、A区で遺構・遺物が検出されたことから居住域の広がりが判明したこと、B区では古墳等の検出はなかったことがある。また、古墳時代後期の遺構は確認されず、遺物も少ないことが明らかとなり、古墳時代中期の古い時期に東側に形成された後背湿地との関係(第4～34次報告書)で、居住域としての土地利用の変化を示している可能性がある。近世では、A区は居住域と生産域、B区は生産域としての土地利用が推定される。

## 引用文献

- 石狩町教育委員会 1977「ワッカオイ地点の礫石器について『ワッカイオⅢ 石狩、ワッカイオ地点D地区における統縄文期の発掘調査』
- 佐藤信行・須田良平 1998「宮城県木戸脇裏遺跡・一本松北遺跡採取の盤状礫石—統縄文文化のいわゆる方割石との類似資料について—」『時の絆 石附喜三男先生を偲ぶ』
- 仙台市教育委員会 2000『沼向遺跡第1～3次調査』仙台市文化財調査報告書 第241集
- 仙台市教育委員会 2004『鴻ノ巣遺跡』仙台市文化財調査報告書 第280集
- 仙台市教育委員会 2009『沼向遺跡第35次調査』仙台市文化財調査報告書 第337集
- 仙台市教育委員会 2010『沼向遺跡第4～34次調査』仙台市文化財調査報告書 第360集
- 次山 淳 1992「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『突班』
- 辻 秀人 1995「東北部における古墳出現期の土器編年 その2」『東北学院大学論集 歴史・地理学』第21号
- 芹沢長介 1976「切込焼の碗と皿」『東北考古学の諸問題』

## 参考文献

- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『中平入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第380集
- 氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第十四輯
- 加藤道男 1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』
- 加藤道男 1996「東北地方の古墳時代の土器（土師器）」『日本土器辞典』
- 佐藤信行 1976「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』
- 白石良一・古川一明 1991「2土師器の編年 8東北」『古墳時代の研究』第6巻
- 仙台市教育委員会 1982『栗遺跡』仙台市文化財調査報告書第43集
- 仙台市教育委員会 1984『南小泉遺跡—第12次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書 第80集
- 仙台市史編さん委員会 1994「2 地形と地質」『仙台市史 特別編1 自然』
- 仙台市史編さん委員会 1999『仙台市史 通史編1 原始』
- 仙台市史編さん委員会 2000『仙台市史 通史編2 古代中世』
- 高木 晃 2007「方割石に関する検討—北上川中流域における様相—」『考古学談議』
- 東北大学埋蔵文化財調査センター 1997『東北大学埋蔵文化財センター年報8』
- 藤沢 敦 1992「引田式再論」『歴史』第七十九輯
- 古川市教育委員会 2002「名生館宮衛遺跡XXⅡ灰塚遺跡」宮城県古川市文化財調査報告書 第30集
- 宮城県教育委員会 1974「岩切湧ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』宮城県文化財調査報告書 第35集
- 宮城県教育委員会 1983「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集
- 宮城県教育委員会 1985「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集
- 宮城県教育委員会 1994「藤田新田遺跡」宮城県文化財調査報告書 第163集
- 宮城県教育委員会 1998「山王遺跡町地区の調査」宮城県文化財調査報告書 第163集
- 宮城県教育委員会 2006「七北田川下流沖積低地における完新世後期の潟湖埋積と自然堤防の形成」『中野高柳遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書 第204集





1. 沼向遺跡遠景（南→）



2. 沼向遺跡全景（北→）

写真図版 - 1 (航空写真)



1. A区Ⅲ層上面遺構完掘状況（北西→）



2. A区SX3607土層断面（西→）



3. A区SX3607完掘状況（西→）



4. A区SX3608確認状況（北西→）



5. A区SX3608土層断面（南東→）

写真図版 - 2 (A区)



1. A区SX3608完掘状况 (北西→)



2. A区SX3613確認状况 (北西→)



3. A区SX3613查出土状况 (北西→)



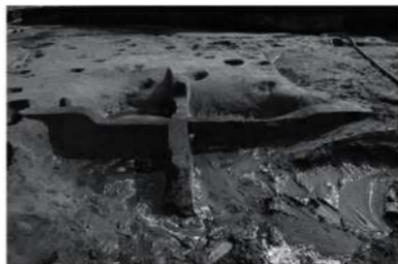
4. A区SX3613遺物出土状况 (北西→)



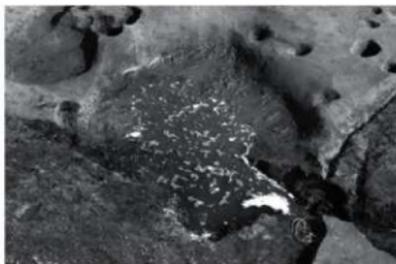
5. A区SX3613土層断面 (南西→)



6. A区SX3613完掘状况 (北西→)



7. A区SX3614土層断面 (西→)



8. A区SX3614完掘状况

写真図版 - 3 (A区)



1. A区SX3604土层断面(南→)



2. A区SX3604土层断面(西→)



3. A区SX3604完掘状况(南→)



4. A区刻形石製模造品出土状况



5. A区II層上面遺構完掘状况(北西→)

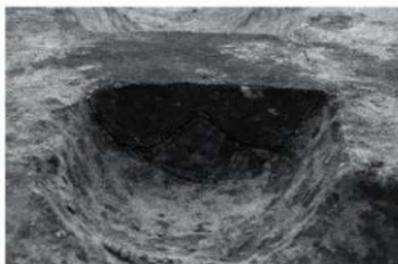
写真図版 - 4 (A区)



1. A区溝状遺構群完掘状況



2. A区H溝状遺構群確認状況（北西→）



3. A区SD3601土層断面（南→）



4. A区SD3601完掘状況（南→）



5. A区SD3602土層断面（南→）

写真図版 - 5 (A区)



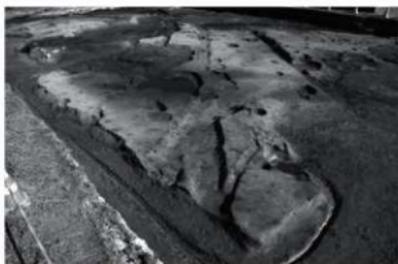
1. A区SD3602完掘状况 (南→)



2. A区SD3604·15土层断面 (西→)



3. A区SD3604土层断面 (西→)



4. A区SD3604·15完掘状况 (西→)



5. A区SD3605土层断面 (西→)



6. A区SD3605完掘状况 (西→)



7. A区SD3606土层断面 (西→)



8. A区SD3606完掘状况 (西→)

写真图版-6 (A区)



1. A区SD3607土層断面 (東→)



2. A区SD3607完掘状況 (西→)



3. A区SD3608土層断面 (南→)



4. A区SD3608完掘状況 (南→)



5. A区SX3603土層断面 (南→)



6. A区SX3603完掘状況 (南→)



7. A区東壁土層断面 (南西→)



8. A区南壁土層断面 (北西→)

写真図版 - 7 (A区)



1.B区Ⅲ層上面遺構完備狀況(北→)



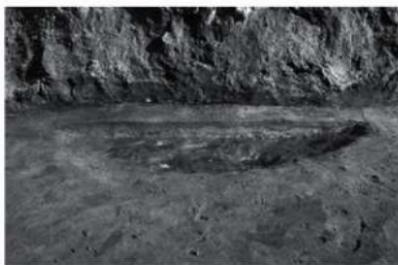
2.B区SX3617土層断面(西→)



3.B区SX3617完備狀況(北西→)



4.B区SX3618完備狀況(西→)



5.B区SX3619土層断面(西→)

写真図版-8(B区)



1.B区II層上面遺構完掘状況(北→)



2.B区SD3614完掘状況(南西→)



3.B区SX3616完掘状況(東→)



2.B区SX2812土層断面(北→)



4.B区SX2812完掘状況(西→)

写真図版-9 (B区)



写真図版-10 (遺物)

報告書抄録

ふりがな	ぬまむかいせいせきだい36じちょうさ							
書名	沼向遺跡第36次調査							
副書名	宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書V							
巻次	V							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第368集							
編集者名	斎野裕彦・佐伯修一・伊藤俊治・岩瀬雄史							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 電話022-214-8894							
発行年月日	2010年3月12日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぬまむかいせいせき 沼向遺跡	せんたいみやぎのく 仙台市宮城野区 なかのあきむらたに 中野字沼向地内	04100	01151	38° 16' 35"	141° 00' 20"	平成21年9月1日 ～ 平成21年11月6日	902㎡	土地区画整理事業 に伴う事前調査
調査区名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
第36次A区	散布地	縄文時代		溝 性格不明遺構		縄文土器 石鏃 弥生土器 製塩土器 非ロクロ土師器 礫石器 石製模造品 非ロクロ土師器		
	散布地	弥生時代						
	集落跡	古墳時代前期						
	散布地	古墳時代中期						
	散布地	古墳時代後期						
	集落跡	近世						
第36次B区	集落跡	古墳時代		性格不明遺構		陶磁器 石製品		
	集落跡	近世		溝 性格不明遺構				
要約	沼向遺跡は、これまでの調査で、縄文時代後期中葉から近世にかけての時期幅があり、主に古墳時代前期、古墳時代後期から平安時代初頭、近世に集落が形成されていたことが明らかになっている。今回の調査成果としては、古墳時代前期では、A区で遺構・遺物が検出されたことから居住域の広がり が判明したこと、B区では古墳等の検出はなかったことがある。また、古墳時代後期の遺構は確認されず、遺物も少ないことが明らかとなり、古墳時代中期の古い時期に東側に形成された後背湿地との関係で、居住域としての土地利用の変化を示している可能性がある。近世では、A区は居住域と生産域、B区は生産域としての土地利用が推定される。							

---

仙台市文化財調査報告書第 368 集

沼向遺跡第 3 6 次調査

—宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書V—

2010 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

〒 980-8671 仙台市青葉区国分町三丁目 7 番 1 号

文化財課 022 (214) 8894

印刷 株式会社 共同印刷所

〒 183-0056 東京都府中市寿町 3 丁目 13 番 8 号

---